大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

『水兵ビリー・バッド』(翻訳 その2)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-08-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 村上, 陽介 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00011050

『水兵ビリー・バッド』

（翻訳　その2）

村上陽介

13

激情は、それが最も奥深いものであっても、その役を演じるに当って豪華な舞台を必要とするようなものではない。下にいる平土間客たち、乞食やごみをあさる者たちの間でも、深遠な激情は演じられる。そして、それを引き起こす状況が、いかに些細な、もしくは取るに足りないものであったとしても、その激情の力を測る目どとはならない。今の場合、その舞台はといえば磨き上げられた砲列甲板であり、激情を引き起こした外的な原因の一つは、一人の水兵がこぼしたスープである。

さて、先任衛兵伍長が、自分が進もうとする先へ流れて来た脂っこい液体がどこから来たのか気付いたとき、それは紛れもなく単なる不測の事故だったのだが、そうとは取らず、自分自身が抱いていた反感に対して多少とも応えるような形で、ビリーの側に自然に生まれた感情を彼が茶目っ気を出して表わしたものと取ったに違いない。そう取ったのも、ある程度は故意によるものであったろうが。クラガートは次のように考えたに違いない。つまり、実際、あんな風に感情を表わすのは馬鹿げているし、若い雌牛の無駄な一蹴りのように、少しも害のないものだ――といっても、その若い雌牛が蹄鉄を打たれた種馬だったら、それほど無害というわけにはいかなかっただろうが、と。たとえそう考えたにしても、クラガートが妬みという胆汁に軽蔑という名の硫酸を注ぎ入れたことに変わりはない。だが、その出来事は、クラガートにとって、「チュウチュウ」から彼の耳に提供されたいくつかの密告を裏付けることとなった。「チュウチュウ」というのは、彼の部下である衛兵伍長たちのうちでも、よりずる賢い部類に属する一人で、白髪まじりの小柄な男だっ

『女子大文学　英語学英米文学篇』（大阪女子大学紀要）第2号、2001年3月

たが、こそ泥たちを発見しようとして下甲板の暗い隅々を探り回るときの彼のネズミのような甲高い声と先のとがった顔つきが水夫たちに地下倉のネズミを風刺的に連想させたので、彼らによって、そういうあだ名が付けられていたのだ。

問題の前檣楼員の気をもませる目的で、いくつかの小さな罠を仕掛けるための暗黙の道具として上司が彼を使ったので――というのも、これまで言及したいくつかの些細な迫害の事例が発生したのは、先任衛兵伍長の差し金によるものだったのだが――この衛兵伍長は、まったく当然ながら、自分の上司がその水兵を好きであるはずはないという結論を下したのだが、彼は忠実な部下だったので、前檣楼員が口にしたものとして、種々さまざまな無礼な侮蔑的言辞をでっち上げ、前檣楼員がそれらをうっかり漏らしたのをふと耳にしたのだと言い張ったのみならず、気立ての良い前檣楼員の悪気のない戯れの数々を彼の上司に故意に歪めて伝えることでその敵意を助長するのを自分の本分としたのである。先任衛兵伍長は、けっしてこれらの密告の信憑性を疑わなかったが、それらの侮蔑的言辞についてはなおさらそうであった。というのは、先任衛兵伍長というものが、少なくとも仕事に熱心なその当時の先任衛兵伍長というものが、陰ではどれほど不人気な存在になっているかもしれないということや、水兵たちがどんな風に彼を密かにからかいや気のきいた冗談の対象にしているかということ、彼らの間では、クラガートはジェミー・レッグズ（がにまた）というあだ名で通っていたのだが、そのあだ名は、表面上は冗談の形を取ってはいたが、裏では、彼らが心に抱いていた軽蔑と反感を示していたことをよく知っていたからだ。しかし、憎しみという感情が糧（かて）を求める際の貪欲さを考えると、クラガートの激情を養うのに、賄い人はほとんど必要無かったのである。

度合の強い狡猾さをともなう堕落には、並外れた慎重さが常に見られるものだ。というのも、何もかもことごとく隠さなければならないからである。そして、何か侮蔑的言動がなされたのではないかと薄々感じただけといったような場合、堕落のもつ、隠し立てを好む性格のせいで、それが事実であることをはっきりと解明するか、あるいは、それが事実無根であることを証することを自らやめてしまう。そして、まるで確実性に基づいているかのよう

に、憶測に基づいて行動が取られるのだが、それも、しぶしぶというわけではない。しかし、報復は、行われたと想定される侮蔑的言動と比べると、途方もなく不釣り合いなものになりがちである。というのは、復讐心は、だれにあっても、取り立てに際して、相手に法外な要求をする高利貸しと同じではないだろうか？だが、クラガートの良心はどうなっていたのだろうか。というのも、良心というのものは、それぞれの額（ひたい）が異なるように人によって相違してはいるのだが、知能をもつものすべてに備わっており、「信じて、震える」聖書の悪魔たちも例外ではない。だが、クラガートの良心は、彼の気持ちを弁護する立場に立っていただけだったので、些細な事柄を人食い鬼のように恐ろしいものに仕立てたわけだが、その彼の良心は、おそらくこう主張したのであろう。つまり、たまたまあのタイミングでビリーがスープをこぼしたときの彼の動機と考えられることは、彼が口にしたとされるさまざまな侮蔑的言辞と重ねて考慮すると、たとえほかのことは考えないとしても、ビリーにとって不利である強力な証拠となる、いや、むしろ、ビリーに対する敵意を一種の報復的正義のようなもとして正当化するのだと。このような正当化を行う独善性は、クラガートのような性質をもつ人物の深部にあるいくつかの隠された部屋をこそこそうろつく陰謀家、ガイ・フォークスのような性格をもつ。クラガートのような類（たぐい）の連中は、自分が敵意を抱いても相手のほうは自分に対して敵意を抱かない場合があるといった事実を考えることは到底できない。おそらく、先任衛兵伍長のビリーに対する秘かな迫害は、ビリーの気質を試して見ようとして始められたのだろう。だが、それは、敵意がおおっぴらに利用できるような、あるいは、さらに進んで、敵意がもっともらしく自己を正当化できるような側面をビリーのなかにまったく生み育てはしなかった。その結果、会食場で起こった出来事は、それが些細な微々たる出来事であっても、クラガートの私的な助言者としての役目を与えられたこの特殊な良心にとっては、喜ばしいものだった。その他の事柄については、ことによると、その事件が彼にあれこれ新しい試みをさせることになったのだろう、とだけここでは述べておこう。

14

前に語った例の事件から幾日もたたないうちに、以前に起きたどの出来事よりもさらにビリー・バッドを当惑させるような事が彼の身に起きた。

それは、緯度の割にはやや暑い夜だった。そして、そのときは正式に非番だったのだが、前檣楼員はハンモックでは暑いので最上層の甲板へ上がり、そこでうとうとしていた。彼のハンモックは幾百もあるうちの一つで、これらのハンモックは下部砲列甲板にとてもぎっしりと詰めて吊り下げられていたので、ほとんど、あるいはまったくといったほうが当たっているかもしれないが、それらが揺れることすらなかったのである。彼は、まるで丘の斜面が作っている日陰で休んでいるかのように、帆のすそを張る円材の陰になった風下側で長々と横になって寝そべっていた。その予備の円材は前檣と大檣のあいだの船の中央部にあり、尾根のように積み上げられており、その中にはその船の一番大きなボート、すなわちランチが置かれていた。ビリーは、下からやってきて眠っている他の三人の水夫と並んで、積み上げられた円材の前檣に近いほうの端近くに横たわっていた。前檣楼員としてマスト上で勤務についているときの彼の持ち場は、船首檣員の甲板での持ち場のすぐ上であり、慣例によって、その前檣近くの場所では彼は多少気楽に振る舞うことを許されていたのである。

まもなく、彼はぼんやりと目を覚ました。何者かが――この人物は前もって他の三人が眠り込んでいることを確かめたに違いなかったが――ビリーの肩に触り、それから、彼が頭を起こすと、すばやく彼の耳に次のようにささやいてから、姿を消した。「船首投鉛台へこっそりやってこい、ビリー。ある事がひそかに計画されているんだ。しゃべるなよ。早くしろ。向こうで会おうぜ。」

さて、ビリーは、種々様々な他の本質的に気立ての良い人々のように、本質的な気立ての良さにつきものの弱点のうちのいくつかをもっていた。そのなかの一つは、一見したところでは明らかに理屈に合わないものだったり、明らかに非友好的というわけでもなかったり、あるいはまた不正なものでもない突然の提案に対して、ずばり「ノー」と言うことに気が進まないこと、

いや、むしろ、ほとんど「ノー」と言うことができないということだった。ビリーは熱血漢だったので、どんなものであれ、ある提案に対して反応せずに放っておき、暗黙のうちに拒絶する冷淡さをもっていなかった。彼の物を恐れる感覚と同様に、正直で自然なこと以外のことについては、それが何であれ、彼の理解力が素早く働くということはめったになかった。そのうえ、今の場合、ビリーには睡眠後の眠気がまだ強く残っていた。

それはともかく、彼は機械的に起き上がると、一体何が計画されているんだろう、と眠そうに考えながら、指定された場所へ行った。そこは六つある狭い平甲板のうちの一つで、高い舷檣の外側に位置しており、大きな三つ目滑車と、横静索（よこせいさく）と後方支索のいくつかの円柱状になった締め綱のせいで、他からは見えなくなっていた。平甲板は、当時の大型の軍艦にあっては、その船体の規模と比例した大きさをもっていた。要するに、海上に突き出た、タールを塗ったバルコニー状のものだったが、とても人目につかない場所だったので、『ベリポテント号』の水夫の一人、ある生真面目な性質の非国教徒の老水夫が、昼間でもそこを自分の私用の小礼拝堂にしていた。

この人目につかない片隅で、先程の得体の知れない男がすぐにビリーのもとにやってきた。月はまだ出ておらず、星の光も靄のせいでぼんやりしていた。ビリーには相手の顔がはっきりとは見えなかった。けれども、輪郭と身のこなしの感じから、彼はその男を後部甲板員の一人だと思った。そして、その判断は間違っていなかったのである。

「しーっ！ビリー」と、その男は前と同じように用心深く、早口でささやいた。「お前は強制徴募されたんだろう？いや、俺もそうなんだ。」そして、その男は相手の反応を見定めようとするかのように、しばらく黙った。しかし、ビリーは相手の発言をどう理解すればよいのかよくわからなかったので、何もいわなかった。それで、その男は次のようにいった。「強制徴募されたのは俺たちだけじゃないんだ。かなりの人数の者がいるんだ――何とか力を貸してもらえないかね――いざというときには？」

「それはどういう意味だ？」今や眠気を完全に振り払いながら、ビリーは強い口調で尋ねた。

「しーっ！しーっ！」と慌ててささやく男の声は今やかすれ声になってい

た。「おい」といいながら、その男は夜の微光のなかでかすかにきらめく二つの小さな物をビリーの目の前に差し出した。「ほら、これをお前にやるぜ、ビリー。もしお前がただ――」

だが、相手がここまでいうと、ビリーが口を挟んだ。憤激して勢い込んで話そうとするあまり、彼のどもり癖が幾分邪魔をする結果となった。「ち、ち、畜生！お前がど、ど、どういうつもりなのか、何をいおうとしているのか僕にはわからん。でも、お前、自分の本来の居場所へ戻ったほうが身のためだぜ！」しばらくの間、男は困惑したかのように身動きしなかった。それで、ビリーはいきなりすっくと立ち上がるとこういった。「もし、か、か、帰らないなら、お前をて、て、手すりから海へほ、ほ、放り投げるぞ！」ビリーが本気であることは誤解のしようもなかったので、その謎の使者はすぐさま大檣の方へ向い、円材の陰へと消え去った。

「おい、どうしたんだ？」ビリーの張り上げた声で甲板での眠りから目覚めた一人の船首楼員がどなる声が聞こえてきた。そして、甲板にビリーが戻ってきて、その船首楼員にもそれがだれだかわかったとき、彼はこういった。「ああ、美男子さん、お前か？いや、何か問題が起きたに違いないな。だって、お前がど、ど、どもっていたからな。」

今ではどもるのを抑えて、「あー、この船の僕たちの持ち場で後部甲板員を一人見つけたので、その男に自分の本来の居場所へ戻るようにいってやったんだ」とビリーは答えた。「それで、戻れといっただけで事を済ませたのかい、前檣楼員さん」と別の船首楼員がしわがれ声で尋ねた。それは、仲間の船首楼員たちに「赤ピーマン」という名で知られている、顔も髪もれんが色の怒りっぽい老人だった。「そんな下劣な奴らは、砲手の娘とめあわせてやりたいぜ！」この表現は、下劣な連中を大砲に縛りつけてむち打ちの刑に処してやりたい、という意味であった。

しかしながら、ビリーの事情説明を聞いて、質問した男たちにもそのちょっとした騒ぎの理由はよくわかった。というのも、船の全乗組員のうち、ほとんどが老練な水夫ばかりで、船乗りとしての偏見にこり固まっている船首楼員たちは、縄張りを犯されるのをだれにもまして嫌っていたからだ。しかも、後部甲板員に縄張りを犯されるのをとりわけ嫌っていた。彼らは、後部甲板

員のことを軽蔑しきっていたのだが、この後部甲板員というのは、主として新参水夫たちで、大檣帆を縮めたり、帆柱に巻つけたりするとき以外は決してマストには登らないし、たとえば、綱通しスパイクを操作したり、三つ目滑車にロープを通したりする点においては、まるで無能だったからである。

15

この出来事があって、ビリー・バッドはわけがわからず非常に困惑した。それは、まったく新しい経験だった。こそこそした、陰謀を企むようなやり方で個人的に話をもちかけられたのは、生まれてこのかた今回が初めてだった。今度出会うまでは、彼は例の後部甲板員についてまったく何も知らなかった。当直中、一人は船首のほうのマスト上におり、もう一人は船尾の甲板上にいるという具合に、二人の男は、はるか離れた部署に配置されていたからである。

あれは、いったいどういう意味だったのか。ビリーの目の前に侵入者が差し出して見せたあの二つのきらきら光る物は、本当にギニー金貨だったのだろうか。あいつはどこでギニー金貨を手に入れることができたのだろう。海上では、予備のボタンさえあまりたくさんはないというのに。この一件について考えれば考えるほど、彼はますます途方に暮れ、不安で落ち着かない気分にさせられた。話をもちかけられて、よくは理解できなかったにせよ、何らかの悪事と関係しているに違いないと本能的に気付いたので彼はぞっとして身を引いたのだが、この点において、ビリー・バッドは、牧草地からやってきたばかりの若い馬が、ある化学工場から出た、じつに不快な臭気を突然吸い込み、何度も鼻息を荒立てて、それを鼻孔、そして肺から吐き出そうとしている様子に似ていた。こういった気持ちだったので、たとえビリーに話をもちかけてきた際の例の男の企みについて何か知るためであったとしても、彼と会ってもっと話し合いたいという欲求は、彼の心から締め出されてしまったのだ。それでも、彼は、薄暗がりのなかのあのような訪問者が白昼ではどんな様子なのか知りたいという、しごく当然な好奇心にかられていなかったわけではなかった。

ビリーは、次の日の午後、一回目の折半当直が非番のとき、問題の男を見つけた。パイプ喫煙のために割り当てられた上部砲列甲板の船首部にいる喫煙者に交じっていた。ビリーには、彼が前夜の男であることがわかったのだが、それはその男のそばかすだらけの丸い顔やほとんど白いといってもよいまつげに覆われた淡いブルーのどんよりとした目によるというよりも、全体的な風貌と体格によってそうわかったのだ。それにもかかわらず、ビリーは、自分とほぼ同じ年ごろで、少し離れたところで大砲にもたれて気さくな様子でしゃべったり笑ったりしている奴、見るからににこにこと愛想のよい若者で、どう見ても、かなりのからっぽ頭の持ち主である男が、本当に例の男であるのかどうか少し自信がなかった。しかも、後部甲板員であったにせよ、船乗りとしては幾分ぼっちゃりしすぎている。手短にいうと、いろいろな考えに頭を悩されているようにはとうてい見えないような人物だった。とりわけ、いかなるものであれ、重大な陰謀を企む人にきっとあるに違いないような、あるいは、そんな陰謀を企む人の手下にさえきっとあるに違いないような、さまざまな危険な考えに悩まされているとは、とても考えられなかったのである。

ビリーは気付いていなかったのだが、その男は注意深く横目で見ていたので、まず彼のほうが先にビリーの姿を認め、そして、ビリーが自分を見ていることを見て取ると、一群の喫煙者たちと交している会話は中断しないでそのまま続けながら、まるで昔なじみの知人に対するかのように、打ち解けた、人なつこい態度でビリーに会釈をした。一日か二日後、砲列甲板を夕方そぞろ歩きしているときに、その男は偶然ビリーとすれ違ったが、いわば親しい人への挨拶とでもいうように、ビリーに言葉を投げかけた。それは思いがけないことであり、また、場合が場合であったために、相手の意図がつかめず、ビリーはすっかり面喰らい、どう反応すればよいのかわからなかった。それで、ビリーは、気がつかなかったことにしてその場はやり過ごしたのである。

ビリーは今、以前よりもずっと途方に暮れていた。彼は何の役にも立たないもろもろの憶測にふけるようになっていたが、そういった憶測は、彼にとってとてもなじみがないものだったので彼を不安にさせ、その結果、彼は精一杯それらを頭から消そうとした。極端に疑わしい事柄であることから考えて、

一人の忠実な水兵としてしかるべき筋に報告するのが彼の義務であると考えられるような事件が起きているとは彼にはまったく思い浮かばなかった。そして、おそらく、たとえそのような行動を取るようにだれかにいわれたとしても、あまりにも卑劣な密告者的行為のような感じがすると考えて、つまり、世慣れぬ人間のもつ高潔さによって、彼はそれを思いとどまっただろう。彼は今回の事件のことを人には話さないでおいた。けれども、一度だけ、彼は例の老いたデンマーク人に打ち明けずにはおれなかった。ある夜、風がなくて船が止まっていたとき、おそらくはその穏やかな夜のムードの影響を受けて、ふとその気になったのだ。二人は、ほとんど無言で、頭を舷檣にもたせかけながら、甲板に一緒に座っていた。打ち明けたとはいっても、ビリーの説明は、部分的で、かつ、名前を伏せたものにすぎなかった。上述したような、根拠のない良心のとがめのせいで、だれに対してであれ、事件の全容を打ち明ける気にはならなかったのだ。こういったビリーの説明を聞いて、賢明なデンマーク人はビリーが語った以上のことを見抜いたようだった。彼はしばらく考え込んだが、その間、彼のたくさんのしわは一点に集められたかのように寄せられ、彼の顔にときどき現われる、例のからかうような表情がしばらくの間すっかり消えてしまった。考え込むのをやめると、彼はこういった。「俺がちゃんとそういっておいただろう、ベイビー・バッド？」

「何て？」とビリーは尋ねた。

「なあに、ジェミー・レッグズがお前に反感をもっているってことさ。」

「それで、ジェミー・レッグズがあの頭のおかしい後部甲板員と何の関係があるというの？」とビリーは驚いて聞き返した。

「ほう、後部甲板員だったんだ、そうすると。キャッツポーだ、キャッツポー！」この「キャッツポー」というダンスカーの言葉が、ちょうどそのとき穏やかな海の上を吹いてきた、猫足風（キャッツポー）と呼ばれる一吹きのそよ風と関係があったのか、それとも、もっと手のこんだ形で、後部甲板員がだれかの手先（キャッツポー）だということをいおうとしたものなのか、どちらかわからなかった。いずれにせよ、「キャッツポーだ、キャッツポー！」と叫んだあと、その老いた予言者マーリンは、ビリーが繰り返して尋ねたのにもかかわらず、彼のせっかちな質問にはまったく返事もせずに、黒い歯で噛みたばこをぐいとひねり回し

た。というのも、彼は、自分の金言めいた、神託のような回答のどれについてであれ、疑っているような態度で質問されると、再び断固として黙り込むのを常としていたからである。これらの回答は、いつも非常にはっきりとした回答であるとは限らなかったし、むしろ、だれから告げられたものにせよ、デルフォイの神託につきまとっているような曖昧さを帯びていたのだが。

この老人は、長い間の経験のせいで、何事にも決して干渉しない、決して助言を与えないという、皮肉な分別心をもつようになっていたのであろう。

16

実際、次に述べる通りだったのだ。先任衛兵伍長が『ベリポテント号』上でのビリーのさまざまな奇妙な体験の原因であるという、デンマーク人の核心をついた断言にもかかわらず、その若い船乗りビリーには、他の人間ならともかく、彼自身の表現を使えば、「いつもぼくに愛想のいい言葉をかけてくれる」男が、そのような経験の原因だとはどうしても思えなかった。これは驚くべきことだ。いや、じつは、それほど驚くには当たらないのである。船乗りのなかには、ある種の事柄については、すっかり大人になってからでさえ、まだ十分に世慣れていない者もいる。ただ、筋骨たくましいわが前檣楼員のような気質をもつ若い船乗りの場合には、まだほとんど子供のような大人であるといえる。しかも、子供のまったくの無邪気さというものは、完全なる無知にすぎない。そしてそういった無邪気さは、知能がだんだん増すにつれて、多かれ少なかれ減少していくものだ。しかし、ビリー・バッドの場合、それほど大したものではなかったにせよ、彼の知能は増してきてはいたのだが、それでも彼の無邪気さはほとんど影響を受けないままであるといった状態が続いていた。経験はまさしく教師である。しかしビリーの歳からいって、彼の経験の量は少なかった。そのうえ、彼は、善ではない人間、あるいは完全に善ではない人間においては経験に先つもので、それゆえ、時としてあまりにも明瞭にそうである場合が見られるように、若い人たちにさえ付随しているかもしれないような、悪についての直感的な知識というものをまったくもっていなかった。

そして、ビリーは単なる船乗りとしてではない人間については何も知りえなかったのだ。しかも、昔気質の船乗り、真正の平水夫、少年時代からずっと船乗りだった人間は、たしかに陸（おか）の人間と同じ種に属してはいるが、そういった人間は陸（おか）の人間とはいくつかの点で非常に異なっている。船乗りは率直であるが、陸（おか）の人間は策略を用いる。船乗りにとって、人生は抜け目なさを必要とするようなゲームではない。まっすぐ駒を動かすことがほとんどないような、そして、間接的な方法で目的が達成される、入り組んだチェスのゲーム、それをするときに燃え尽くされる哀れなろうそくの代金ほどの価値もない、からめ手から狙う、退屈で、無益なゲームではないのだ。

たしかに、一つの人間の部類として見ると、船乗りは性格的に未熟な種族である。彼らの逸脱行為でさえ、未熟さで際立っている。これはビリーの時代の船乗りにとくによく当てはまることである。さらにまた、すべての船乗りに当てはまる類（たぐい）のことのなかには、ここかしこで年少の船乗りに対してもっとあからさまに影響を及ぼすものもいくつかある。すべての船乗りはまた、命令を与えられれば、それについて熟考することなく服従することに慣れている。彼らの海上での生活は、自分以外のものによって規定されている。彼らは、あの相手を問わぬ他人との交際に引き入れられることはない。そういった交際においては、邪魔をするもののない自主的行動権、少なくとも表面的には対等な自主的行動権を行使するのであれば、いざというときには、外見が公正であればあるほどますます疑ってかからないとひどい目に会うかもしれないということを私たちはすぐに悟る。抑制された、あらわには示されない疑い深さは、商売人よりもむしろ、商売よりも深い関係において人間というものを知っている人たち、すなわち、ある種の世間知にたけた人たちにとって、あまりにも習慣的になっているので、彼らはついにはほとんど無意識にそれを発揮するようになる。そして、彼らのなかには、疑い深さが彼らの一般的特性の一つだといって責められると、おそらく心底から驚いてしまう者もいるだろう。

17

だが、会食場でのちょっとした事件のあとでは、時折起こっていたハンモックや衣類袋などについての奇妙なごたごたに、ビリー・バッドはもはや巻き込まれなくなった。ときおり陽光のごとくに彼に投げかけられたあの微笑みと通りすがりの愛想のよい挨拶についていえば、これらは、以前より頻繁ではなかったにせよ、どちらかといえば、以前よりなおいっそう際立ったものとなっていた。

だがそれにもかかわらず、今や、別の感情の表われが見られるようになった。ベルトを付けたビリーが、第二折半当直が非番のおり、人込みに交じってそぞろ歩きをしている他の幾人かの若者たちと一斉射撃を交わすかのように楽しく言葉を掛け合いながら、上部砲列甲板を体をゆすって歩いていたとき、他人には気付かれないまま、クラガートがたまたまビリーに偶然目を留めることがあったが、そういったとき、クラガートは、落ち着き、考え込んでいるような、憂鬱な表情を浮かべながら、その機嫌のよい海のヒュペリオンをその目で追った。彼の両目には、不思議なことに、熱病の初期に見られるような涙がいっぱい浮かんでくるのだった。そのとき、クラガートは悲しみの人のようだった。そうなのだ。しかも時には、その憂鬱な表情には、あたかも彼が宿命によって禁止されていなければ、ビリーを愛することさえできたことを伺わせるかのように、穏やかなあこがれも見られた。だが、これは束の間のことだった。あたかも後悔したかのように、クラガートはすぐさま顔を引きつらせ、しぼませて、いっときの間、しわの寄ったクルミに似た、和らげることの不可能な顔つきになった。だが、ときどき、クラガートは、前檣楼員のビリーが自分のほうにやって来るのをあらかじめ見かけると、二人の距離が近づくやいなや彼をやり過ごすために少し脇へ寄ったものだ。そして、ギーズ公のように歯をきらりと光らせた皮肉な笑いを浮かべながら、しばらく視線をビリーから離さなかった。しかし、突然、予期せぬまま出会ったときにはいつも、薄暗い鍛治屋の鉄床(かなとこ)から出る火花のように、赤い光が彼の目からぱっと現われた。そのすばやく激しい光は、落ち着いているときには濃いスミレに一番近い色の両眼、すなわち最も穏やかな色合いの両眼から

放たれただけに、不思議な光だった。

こういった目の急変は、時にはその対象に気付かれないわけにはいかなかったが、とうていビリーのような性質の人間に解釈できるものではなかった。そして、ビリーのみなぎる活力は、時には悪意をもつものが近くに存在していることについての警告を、無知そのものである無邪気さに本能的に伝えるような、敏感な精神機構の類とはほとんど両立できないものであった。先任衛兵伍長はときどき幾分風変わりな振舞いをするな、と彼は考えていた。それだけだった。しかし、この若い水兵は例の「あまりにも口のうまい男」のことをまだ一度も聞いたことがなかったので、クラガートが時折見せるざっくばらんな態度や愛想のよい言葉をその額面通りに受け止めていた。

もし、その前檣楼員に、上官の反感を引き起こすような何かをした、あるいは、何かをいった、という自覚があったなら、状況は違ったものになっていただろうし、彼の物を見る眼は、研ぎ澄まされるとまではいかなくても、その曇りは取り除かれていたかもしれない。だが、実際には、無邪気さのせいで実相を見抜くができなかったのだ。

さらにもう一つ別の事柄についても同様であった。ビリーの船での地位が地位だったので、接触することがなくて、彼が一度も言葉を交したことがなかった二人の下級士官——火器係と船倉長——が偶然ビリーと出会ったとき、彼らは今初めて、ある妙な目つきでビリーを見始めたのである。それは、そういった目つきで相手を見る人間が何らかの不当な影響を受けていること、しかも、視線が注がれる人物にとって不利益となるような影響を受けていることを明らかに示すような目つきだった。火器係と船倉長が、船の倉庫係下士官や薬剤係下士官や同じ階級のほかの数人とともに、海軍の習慣によって、先任衛兵伍長の会食仲間であり、クラガートの内密の発言を耳にするのに都合がよい立場にいたことをビリーはよく知ってはいたのだが、彼はそのことを気に留めるべきこととも思わず、また、不審に思うべきこととも思わなかった。

しかし、われらが「ハンサム・セイラー」がここぞというときに見せる男らしい積極性と、他人の妬みを買うような優越感は何も表わしていない、大変魅力的な気立ての良さからくる一般的な人気、また、ビリーの水夫仲間た

ちのほとんどの者が彼に示す好意のせいで、先程少し触れたような、彼に向けられた無言の表情について、彼はなおさら無頓着になった。ビリーには、この無言の表情を推し測り、その総体的意味を推察することは及びもつかなかったのである。

そこで、例の後部甲板員のことだが、すでに述べたような理由で、ビリーは、当然ながら、彼をほとんど見かけなかったが、それでも、二人が偶然出会ったりしたときには、後部甲板員は決まっていつも屈託のない、陽気な合図をしたり、ときには、何気ない愛想のよい言葉の一つ二つを掛けたりもした。その疑わしいところのある若い男の独自の企み、あるいは、彼が手先を務めている人物の企みが何であったにせよ、こういったときの彼の態度から判断して、彼がその企てを今や完全に放棄しているのは確かだった。

それは、あたかも後部甲板員の早熟な腹黒さが——下劣な悪党はすべて早熟なのだが——この度だけは彼を欺いたかのようであり、彼が間抜けな男だと思って罠に掛けようとしていた男が、まさにその単純さでもって彼をまごつかせ、面目を失わせてしまったかのようであった。

しかし、抜け目のない人たちは、ビリーが後部甲板員の所へ行って、船首投鉛台であまりにも突然打ち切られたあの最初の会談における彼の目的は何だったのか、とぶっきらぼうに詰問するのを差し控えることはほとんどありえなかったと考えるかもしれない。抜け目のない人たちはまた、船上で、不満のあまり陰謀が企だてられているということに関しての密使のあいまいなほのめかしにもし何か根拠があるとすれば、その根拠がどのようなものであるのか発見するために、ビリーが他の強制徴募された男たちの何人かの考えを探り始めるのが当然であったと考えるかもしれない。さよう、抜け目のない人たちは、そう考えるであろう。しかし、ビリー・バッドのような人間の性格を正当に理解するには、何か抜け目のなさ以上のもの、というよりは、単なる抜け目のなさ以外のものがおそらく必要である。

クラガートについていえば、詳述したような感情の衝動的な表れにおいて心ならずもあらわにされたが、一般には、彼の自制の効いた、理性的な物腰によってすっかり覆われていた彼の偏執狂——もし実際それが偏執狂であったとすればの話だが——は、地中の火のごとく、ますます彼の内部のより深

い所へと燃え進んでいた。今や、何か決定的な事が起きて当然であった。

18

船首投鉛台での謎めいた会談の後、つまり、その場でビリーによってまったく突然に打ち切られた例の会談の後、次に語る事件が起きるまでは、この物語にとくに密接な関係があることは何も起こらなかった。

すでに別の所で述べたが、ジブラルタル海峡を越えて地中海にあった英国艦隊においては、フリゲート艦（もちろん、これは戦列艦よりもすぐれた帆走能力をもつ帆船であったが）が不足していたので、『ベリポテント号』は、単に偵察艦の代用としてすぐに利用できる船としてときどき用いられただけでなく、ときにはもっと重要な種類の任務のために単独で派遣された。このことは、『ベリポテント号』の帆走能力が同じ等級の船のなかでは珍らしいほど優れているという理由によるだけではなく、おそらく、それに劣らず、『ベリポテント号』の司令官が、その性格からして、思いがけない難事のもとで、すぐれた操船術に当然伴うさまざまな特質に加えて知識と能力を必要とするような何らかの事態において、すぐさま率先して行動しなければならないかもしれないようなどんな任務に対しても、格別の適応性をもっていたと一般に考えられていたという理由にもよるものであったろう。午後当直の後半に、『ベリポテント号』が思いがけなく敵艦の一隻が見える位置にやってきたのは、幾分遠方への任務に派遣されていて、艦隊からこれほど離れたことはないといってもいいような場所にいたときだった。敵艦はフリゲート艦であるとわかった。そのフリゲート艦は、望遠鏡によって、人員と大砲の数において自艦のほうが不利だとわかったので、船足の速いのを頼りに、通常よりたくさんの帆を張って逃げようとした。ほとんど無駄だとわかっていながらも、『ベリポテント号』は第一折半当直の中頃まで懸命に追跡を続けたのだが、敵艦は見事に逃げおおせてしまった。

追跡をあきらめてから間も無くのこと、その興奮が未だ冷めやらぬころ、先任衛兵伍長は、洞窟のような彼の持ち場から上がり、帽子を脱いで手にもち、大檣のそばに姿を現わして、ヴィア艦長が気付くのをうやうやしく待っ

ていた。そのときヴィア艦長は、おそらくは追跡の失敗に幾分苛立って、後甲板の風上側を一人で散策していた。クラガートの立っていたのは、当直士官あるいは艦長自身との何か特別の会見を求める際に、下の階級の者たちに割り当てられた場所だっだ。しかし、当時の一水兵や一下士官が艦長に発言の機会を求めることは、よくあることではなかった。慣習によれば、それは、何か例外的な理由があって初めて許されることであった。

やがて、考え事に夢中になっていた艦長は、船尾のほうへ足を向けようとした丁度そのとき、クラガートの存在に気がつき、うやうやしく待ち望むように、脱いだ帽子が胸に当てられているのを見た。ここで、いっておくが、この下士官についてヴィア艦長が個人的に知ったのは、この船が今回英国を出航したときが初めてであった。クラガートはそのとき初めて、修理のために引き留められた船から転属になり、任務を続行できなくなって陸(おか)に上がった前任の先任衛兵伍長の代わりを『ベリポテント号』上で務めることになったのだ。

ヴィア艦長は、自分が気付くのを待ってうやうやしい態度で立っているのがだれであるのか見て取るやいなや、奇妙な表情を浮かべた。それは、確かに知ってはいるのだけれども、知り尽くすほど長い間知っているというには程遠いのだが、それでもその顔つきが何かしら今初めて、ある漠然とした不快な嫌悪感を引き起こすような相手にばったり出くわした人が、自分の顔に浮かぶのを禁じ得ないような表情に似ていなくもなかった。だが、ヴィア艦長は立ち止まり、ある種の苛立ちが冒頭の単語の抑揚に潜んでいたのを除いては、職務にふさわしい彼のいつもの態度をほぼ取り戻して、「それで、何の用かね、先任衛兵伍長？」といった。

やむなく悪い知らせを伝える役目を務めなくてはならないことを深く悲しみ、一方で、率直に述べようと良心に誓って決意しながらも、同時に大げさに話すのは避けようと心に決めている部下としての雰囲気を漂わせながら、クラガートは、思っていることを打ち明けるようにというこの招き、いや、むしろ要求というべきものを受けて、遠慮せずに話した。無学どころか教養のある人間の言葉でもって彼が伝えたことは、もしまったくこの通りの言葉遣いではなかったとしても、およそ次のような趣旨であった。すなわち、追

跡の間、そして、起こるかもしれない交戦のための準備をしている間、クラガートは、乗組員のうちの少なくとも一人の水夫が、最近の重大な事件に荷担した者たちだけでなく、問題の男のように、志願以外の形で国王陛下の軍務に就くことになった者たちも何人か入隊させていた船においては、危険な人物であることを確信するに足る十分な根拠を目にした、というのである。

このとき、ヴィア艦長は幾分苛立ってクラガートを遮っていった。「はっきりいったらどうだ、強制徴募された者たちと。」

クラガートはこびへつらうような身振りをして、それから話を続けた。つい最近、彼（クラガート）は、砲列甲板において、問題の水夫によって引き起こされた、ある種の動きが密かに進行している、と感づき始めたが、彼は、疑いがぼんやりしたものであるかぎり、その疑いを報告すべきだとは思っていなかった。しかし、その日の午後、問題の男を観察したところ、何かが秘密に進行しているという疑いがもっと確実なものになった。主たる関係者に由々しき影響をもたらすかもしれないことは無論のこと、名前を挙げる必要もないが――彼は悲しそうにいった――最近起こった並々ならぬ暴動から考えて、海軍司令官ならだれでも感じているに違いない当然の不安を増大させる結果を生むだろうような報告をすることに重大な責任が伴うことを痛切に感じている、と彼は付け加えた。

さて、初めてこの問題が切り出されたとき、ヴィア艦長は不意を突かれて、不安を隠し切ることができなかった。しかし、クラガートが話を続けるにつれて、彼の表情は、供述する際の証言者の態度に見られた何物かのせいで、反発を示す表情に変わった。しかしながら、艦長は、我慢して、クラガートの話の腰を折ることはしなかった。そして、クラガートは話を続け、こういって締めくくった。「閣下、『ベリポテント号』が断じてあの船の二の舞になりませぬように。つまり、例の――」

「余計なことをいうな！」怒りで形相を変えながら、ヴィア艦長はここで断固として話に割り込んだ。相手が名前を挙げようとした船は、ノアでの暴動が特に悲劇的な性格を帯び、しばらくの間その司令官の生命が危険にさらされた船であることを直観的に見抜いていたからだ。場合が場合だけに、彼は相手がわざわざこの事件に触れたことに憤慨していたのだ。士官たちが、

海軍における最近の出来事についてどのように言及するか、いつもとても気を遣っていたのに、下士官が艦長の面前で不必要にそれらについて触れるのは非常に不謹慎な思い上がりであるという感じを与えた。さらに、彼の鋭敏な自尊心にとって、こういった状況では、それは彼を不安に陥れようとする企てのようなものにさえ幾分思えたのだ。これまでヴィア艦長の目に留った限りにおいては、その職務の遂行にかなりの如才なさを発揮してきた男が、今回あまりにもそれを欠いていることに、最初は、ヴィア艦長も多少の驚きを感じないわけではなかった。

だが、彼の脳裏を横切っていたこういった考えとそれらと類似した、さまざまなあいまいな考えは、まだ、はっきりとした形を取ってはいなかったが、これらは、悪い知らせの受け取り方に実際に影響を及ぼした、一つの直観的推測に突然取って変わられた。ほかのすべての生活の形態のように、秘密の地下抗道といかがわしい側面、世間ではそんなものは存在しないといわれている側面をもつ複雑な砲列甲板での生活に関するすべてのことに長期にわたって精通していたので、ヴィア艦長が、彼の部下の報告の大よその内容を聞いても、必要以上に動揺させられることのないように自制したのは確かである。

さらに、最近のいくつかの事件にかんがみ、暴動の再発の最初の明白な兆しに気付きしだい機敏な措置を取るべきであったとしても、それにもかかわらず、たとえ情報提供者が自分の部下であり、しかもその人物が、とりわけ、乗組員を監視する任務を与えられていようとも、彼を必要以上に早々と信用することによって、不満が解消されていないという考えを正しいものとして受け入れるのは賢明ではない、とヴィア艦長は考えていた。以前に、クラガートが職務上示した強い愛国的熱意が、やや過敏で不自然なものに見えて、幾分苛立ったということがなかったならば、ヴィア艦長もこういった気持ちにそれほど強く影響を受けはしなかったであろう。そのうえ、奇妙なことに、明細を述べるときのクラガートの冷静で多少これ見よがしな態度にさえ、ヴィア艦長がまだ大尉のころ列席したことのある、陸上で行われた軍法会議にかけられた重大な事件で、証人として偽証を行った一人の楽団員をなんとなく彼に思い出させるような面があった。

さて、問題の船の名前をいいかけたクラガートを有無をいわせず遮ったあと、ヴィア艦長はすぐに次のように続けた。「君は、この船に少なくとも一人は危険な男がいるという。その男の名前をいってみろ。」

「前檣楼員ウィリアム・バッドです、閣下。」

「ウィリアム・バッド！」ヴィア艦長は驚きを隠さず繰り返した。「ラトクリフ大尉がこのあいだ商船から連れてきた男、水兵のあいだで人気のあるように見えるあの若い男のことをいっているのか？『ハンサム・セイラーのビリー』と水兵たちに呼ばれている男のことか？」

「その男であります。閣下。しかし、彼の若さや顔だちの良さにもかかわらず、一癖も二癖もある奴です。うまく船員仲間に取り入って彼らの好意を勝ち得ているのも目的無しというわけではありません。といいますのも、少なくとも船員仲間は、いざというときには、一人残らず、危険を顧みずに彼の弁護をするだろうからです。バッドが連れてこられる際に、カッターが商船の船尾の下にきたとき、その舳先でぱっと立ち上がっていった、あの巧妙な嫌味を、ラトクリフ大尉からお聞き及びでしょうか？彼は、強制徴募されたことに心の底では腹を立てていることを、そういった陽気な態度で隠しているのです。艦長は彼の美しい頬にのみ目を留めておられるのです。先端の赤い雛菊の下に恐ろしい人捕り罠が仕掛けられていることもあるのです。」

さて、乗組員のなかで注目に値する人物としての「ハンサム・セイラー」は、まったく当然のことながら最初から艦長の注意を惹いていた。普段は、艦長は配下の士官たちに自分の気持ちをあまりあらわには示さなかったが、裸体になって、堕落する前の若いアダム像のためのポーズを取ったといっても通るような、じつに見事な人間の標本を偶然見つけた幸運に対して、ラトクリフ大尉に祝いの言葉を述べたのであった。ラトクリフ大尉は、ビリーの『人間の権利号』への別れの挨拶については確かに艦長に報告していたのだが、しかしそれは丁重な様子で、なによりも美談として伝えられたのだった。その別れの挨拶については、ヴィア艦長は皮肉な当てこすりであると間違って理解していたのだが、その挨拶のために、ビリーのことをますます高く評価したのである。海軍の軍人として、それほど陽気に、そして賢明に強制徴募を受け止めることのできた気性に感心したのである。ヴィア艦長の目に留

まった限りでは、その前檣楼員の振舞いも、最初のよき前兆が間違っていないことを示していた。一方、その新しい入隊者の水夫としての資質は優れていたものだったので、ヴィア艦長は、もっと頻繁に自分自身で観察できる地位、つまり、後檣楼長に彼を昇進させるよう、副長に推薦しようと考えたくらいであった。そのとき後檣楼で右舷の見張りについているあまり若くない男は、一つにはその年齢のために、ビリーほどにはその仕事に向いていないとヴィア艦長は思っていたので、その男の代わりをさせるつもりであった。ここで説明的な言葉を差し挟むなら、後檣楼員は、大檣および前檣の下部帆のような幅のある重い帆布を扱わなくてもよいので、もしぴったりの素質をもっておれば、若い男が一番向いているように思えるだけでなく、事実、一般的に若い男が後檣楼長の仕事に選ばれたのである。そして、そういった男の部下たちは、身軽な水夫で、単なる青二才であることが多かった。つまり、ヴィア艦長は、初めから、ビリー・バッドを当時の海軍用語で「陛下の掘り出しもの」と呼ばれていたものと見なしていた。いい替えれば、英国国王陛下の海軍にとって、小額しか支出しないですむ、あるいはまったく何も支出しないですむ資本投資であった。

ヴィア艦長はしばらく黙ったが、その間、上述したような思い出がありありと彼の心に浮かび、彼は「雛菊の下の人捕り罠」という言い方を使ってクラガートが最後に示唆したことの意味をよく考えてみた。しかし、それをよく考えれば考えるほど、その情報提供者の誠意に対する信頼がますます薄らぎ、やがて、彼は突然クラガートの方を向き、低い声で、厳しい調子で尋ねた。「先任衛兵伍長、君はそんなぼんやりした話をするために私の所にやって来るのかね？バッドに関しては、君が彼に対してざっと非難したことを確証するような彼の行いか、彼が口にした単語を一つでも私に挙げて見ろ。ちょっと待てよ。」彼はクラガートのほうに近寄りながら言葉を続けた。「気を付けて物を言えよ。今、このような場合においては、偽証を行う者には桁端での刑罰が課せられるぞ。」

「ああ、閣下！」そのような理不尽なまでの口調の激しさを悲しげに非難するかのように、形の良い頭を穏やかに振って、クラガートはため息をつきながらいった。それから、頭をつんと上げ、自分が曲がったことをしていな

いことを主張するかのように背筋を伸ばして、あれこれの単語と行いを詳しく述べ立てた。これらは、もし事実として信ずるなら、全体として、致命的にバッドに罪を負わせるような根拠となるようなものであった。そして、これらの申し立てのいくつかについては、裏付けとなる証拠がすぐに手に入ります、と彼は付け加えていった。

ヴィア艦長は、苛立った、疑い深い灰色の目で、クラガートの冷静な、スミレ色の目の奥まで見透かそうとしながら、再び相手の話を最後まで聞き、それからしばらくの間、じっと考え込みながら立っていた。自分自身は少しの間相手の探るような視線から解放されていたのだが、クラガートは、ヴィア艦長がどのような気分であったのかあらわに示しているのを、いうにいわれぬ目つきでじっと見つめていた。それは、自分の策略の効果を知りたがっているような目つき、心配している家長ヤコブに、子山羊の血で染められた若きヨセフの上着を見せてだまそうとしている、ヤコブの妬み深い子供たちの代表の目つきもそうであったかもしれないと思われるような目つきであった。

ヴィア艦長は、彼自身の道徳的特質に見られた例外的な何かによって、一人の人間との真剣な対決において、相手の本質的な性質を見抜く、真の試金石のような人物であったが、今の場合、ヴィア艦長は、クラガート自身について、またクラガートの心の中で実際に起きていることについて、直感による確信よりも、奇妙な疑わしい事柄だらけの強い疑惑をむしろ感じていた。ヴィア艦長が示した当惑は（クラガートは間違いなくそう思ったのだが）彼によって罪状を告げられた人物に関係する何かから生まれたというよりも、情報提供者であるクラガートに関してどのように行動すれば一番よいかを考慮していたことから生まれた。実際のところ、ヴィア艦長は、当然ながら最初は、すぐに手に入るとクラガートが述べた、彼の申し立てを裏付ける証拠を要求するのがよいと考えていた。だが、そのような手順を踏めば、この問題がすぐにあちこちに広まるような結果を招くだろうし、そうなれば、現在の段階では、この船の乗組員たちに好ましくない影響を及ぼすかもしれない、と彼は考えた。もしクラガートが偽証をしているのであれば、それでこの件には決着が付く。したがって、告発の内容を調べる前に、告発者であるクラ

ガートをまず実際に試してみるのがよかろう。しかも、これなら、内密に、目立たない方法でできるだろう、とヴィア艦長は考えた。

彼が決めた方策は、場所の移動、つまり、広い後甲板ほど人目にさらされない場所への移動を必要とした。というのは、次のような事情があったからだ。ヴィア艦長が甲板の風上側を散歩し始めたとき、そのとき後甲板にいた数人の下級将校室の将校たちは、当然のことながら、海軍の礼儀を守って風下に引き下がり、クラガートとの会話のあいだ、彼らはもちろんその距離をあえて縮めようとはせず、また、会見の間じゅう、ヴィア艦長の声は決して高くはなく、クラガートの声は澄んで低かったし、音を立てて索具のあいだを吹き通る風と打ち寄せる波の音が彼らの声をさらに聞こえにくくしていた。それにもかかわらず、会見が長引いたため、マストの上にいる幾人かの檣楼員や、上甲板中央部もしくはもっと船首のほうにいる他の水兵たちの注目をすでに集めていたのだ。

方策を決めると、ヴィア艦長は直ちに行動した。突然クラガートのほうを向いて、彼は次のように尋ねた。「先任衛兵伍長、今はバッドのマスト上での当直時間なのか？」

「いいえ、閣下。」

そこで、ヴィア艦長は、「ウィルクス君！」と一番近くにいた海軍少尉候補生を呼びつけた。「アルバートに私のところに来るようにいってくれ。」アルバートというのは、艦長の当番兵で、彼の主人である艦長が、その慎重さと忠誠に非常に信頼をおいている、船上の付き人ような男だった。その若者が姿を現わした。

「お前は前檣楼員のバッドを知っているな？」

「はい、知っております。」

「彼を探しに行ってこい。彼は今非番だ。何とかうまく他の人間に聞こえないところで、船尾に出頭することを求められていることを彼に伝えてくれ。彼が誰とも話をしないように工夫しろ。お前自身と話をするように仕向けろ。そして、間違いなく船尾へ着いてしまうまでは、彼が出頭すべき場所が艦長室だということを彼に悟られるな。わかったな。さあ、行ってこい——先任衛兵伍長、下の甲板に行け。アルバートがあの男を連れてやってくる頃合い

だと思ったら、あの水兵に続いて部屋に入れるよう、静かに待機するんだ。」

19

さて、問題の前檣楼員は、自分が艦長とクラガートとともに艦長室にいわば閉じ込められているのに気がついたとき、すっかり驚いた。しかし、それは、不安や不信の念を伴った驚きではなかった。本質的に正直で心の優しい未熟な人間にとって、自分の仲間から加えられる、普通以上に巧妙な危険を前もって警告する知らせは、かりにやって来るとしても遅ればせにやって来るものだ。その若い水夫の頭のなかではっきりとした形を取った唯一の考えは、次のようなものであった。「そうだ。ずっとそう思っていたんだけど、艦長は僕を好意的に見てくれているんだ。艦長は僕を彼の小型艇の艇長にしようとしているんじゃないかな？そうだといいんだけど。だから、これから、先任衛兵伍長に僕について尋ねようとしているんだろう。」

「そこのドアを閉めろ、見張り兵」と艦長がいった。「外に立っていろ。そして、だれも中に入れるな――さて、先任衛兵伍長、この男について君が私に話したことを、本人に面と向かっていうんだ。」そして、お互いに向かい合っている二つの顔の表情をじっと見守るべく、彼は心の準備を整えた。

入り口のホールで、来たるべき発作の兆候を表わし始めている患者に近づきつつある精神病院の医者のように、歩調を整え、穏やかな落ち着いた様子で、クラガートはゆっくりとビリーのすぐ近くまで進み出た。そして、催眠術を掛けるがごとくにビリーの目をじっと見つめ、告発の要点を繰り返した。

初めは、ビリーは、その告発の内容を理解しなかった。彼がそれを理解したとき、ビリーのバラ色に日焼けした頬は、白いハンセン病にかかったかのごとくに見えた。彼は、串刺しにされ、猿ぐつわをはめられたかのように立ち尽くしていた。そうしているうちに、ビリーの青い、大きく見開かれた目を未だに見つめたままの告発者の目は、驚くべき変化を見せた。つまり、そのいつもの豊かなスミレ色がぼんやりとしたものになり、やがて濁った紫色に変わったのだ。人間の知性を示す明りであるその目は、人間的な印を失い、目録に載っていない、ある種の深海の生き物たちの、人間の目とは性質を異

にする目のように、冷たく飛び出していた。最初の催眠術的な一瞥は、蛇が相手をすくませるときのような一瞥であり、最後のまなざしは、シビレエイが突然さっと斜めに進み、相手を刺して麻痺させるさまを思い起こさせた。

「おい、何かいえ！」ヴィア艦長は、クラガートの顔つきよりも、立ちすくんでいるビリーの顔つきのほうにさらに圧倒され、彼にいった。「何かいうんだ。自分を弁護しろ！」この要請の結果として、ビリーは一つ奇妙な無言の身振りをし、のどをゴロゴロ鳴らしただけだった。経験の浅い未熟者にあまりにも突然降り懸かったそのような告発に対する驚愕と、おそらくは、それに加えて、告発者の目の恐ろしさが、ビリーの隠れた欠陥をあらわにする役目をし、さらに、この場合には、しばらくのあいだ、その欠陥の度合を強め、激しく震える舌のもつれを引き起こしたのだ。そして、何かいって自己弁護しろという指図に、無駄にもかかわらず従おうと切望することから生まれる激しい苦痛にもだえ、精一杯努力していてつんのめりかかっている頭と体全体のせいで、ビリーの顔に、生き埋めにされんとする瞬間、窒息に対して最初にもがき苦しむときの、有罪とされたウェスタの処女尼僧の表情に類似した表情が浮かんだ。

それまで、ヴィア艦長は、ビリーが言語障害に陥りやすいことをまったく知らなかったのだが、今や直ちに彼はそれを見抜いた。それは、ビリーの顔つきが、彼が一度見たことがある、一人の頭のよい若き級友の顔つきをまざまざとヴィア艦長に思い出させたからである。この級友は、先生が出したテストの質問に真っ先に答えようとして、やる気まんまんで授業中に立ち上がったとき、ビリーの場合とほとんど同じ、びっくりさせるような言語障害に見舞われたのだった。若い水夫に近づきながら、気持ちを落ち着かせるように片手を彼の肩に置いて、ヴィア艦長はいった。「君、急ぐことはないんだ。ゆっくりやれ、ゆっくり。」慈父のような口調で述べられたこの言葉は、確かにビリーを深く感動させたのだが、意図された効果とは逆に、彼になお一層激しく発言しようと努力することを促した。その努力は、すぐに、麻痺をしばらくの間強める結果をもたらし、そのために、彼の顔に浮かんだ表情を見ることは、はりつけを見るようなものであった。次の瞬間、夜に撃たれた大砲から出た炎のように、ビリーの右腕がすばやく突き出され、クラガートは

ばったり甲板に倒れた。意図的なものであったにせよ、あるいは、強健な若者の相手を上回る背の高さのせいであったにせよ、その一撃は先任衛兵伍長のとても形の良い、知力を思わせる額にまともに命中していた。その結果、クラガートの身体は、垂直に立っていた重い厚板が傾けられたときのように、縦に倒れた。一度か二度あえいだあと、彼は倒れたまま身動きしなくなった。

「運の悪い若者よ」とヴィア艦長は小声でいったが、彼の声はとても低くてほとんど囁き声といってもよかった。「何という事をしてしまったんだ。だが、さあ、手を貸せ。」

二人は殴り倒されたクラガートの上体を持ち上げて、座っている姿勢にした。痩せた身体は意のままに黙って従ったが、ぐったりとしていた。まるで、死んだ蛇を扱っているような感じだった。二人は、クラガートの身体を元の位置に戻した。ヴィア艦長は、直立の姿勢に戻って、片手で顔を覆いながら立っていたが、彼の足元の物体と同じように、どう見ても感覚を無くしているようであった。彼は、事件をあらゆる面から理解すること、そして、ただ、その時何をすれば一番よいかということだけでなく、そのあとで何をするのが最善なのかを考えることに没頭していたのだろか？ゆっくりと彼は自分の顔を覆っていた手をはずした。その結果、ヴィア艦長の顔は、まるで月食が終わって出てきた月が、月食が始まる前の月と比べてまったく別の外観を伴って再び現われたかのように、変化していた。これまでの場面で現われていた、彼のうちにある「父親」が、軍規至上主義者と入れ替わった。職務的な口調で彼はその前檣楼員に、船尾のほうの特別室に引きこもり、その後呼ばれるまでそこにいるように（特別室をを指し示しながら）命令した。この命令にビリーは黙って機械的に従った。それから後甲板に向いている船室のドアのほうへ行って、ヴィア艦長は外にいる見張り兵に「アルバートをここによこすように誰かにいえ」といった。例の若者が現われたとき、艦長は彼が横になっている人間に気がつかないように工夫した。「アルバート、軍医に私が会いたがっていると伝えてくれ。君は呼ばれるまで戻ってくる必要はない」と艦長は彼にいった。

軍医は、ほとんど何事にも驚かないほどの厳粛な思慮分別と経験をもつ、冷静な人物だったのだが、彼が入ってきたとき、ヴィア艦長は彼を出迎える

ために前に進み出た。そうやって、無意識的ながら、クラガートの姿が相手に見えないようにしたのだ。そして、軍医のいつもの儀式ばった挨拶を遮って、相手の注意を横になっている男のほうへ促しながら、次のようにいった。「いや、あそこの男はどんな具合かね。」

軍医は見た。そして沈着な人物であるにもかかわらず、不意に意外なものを見せられて幾分ぎくっとした。クラガートのいつもの青白い顔に、鼻と両耳から濃い血が今じわじわ流れ出ていた。専門家としての軍医の目で見ると、それは明らかに生きている男ではなかった。

「それでは、やはりそうか？」とヴィア艦長は彼をじっと見つめながらいった。「私はそうだと思った。しかし、確かめてくれ。」そこで、通例どおりのいくつかの検査の結果、軍医が最初の一瞥で見て取ったことが間違いでないことがはっきりしたのだが、軍医は、今や、見せかけではない懸念を示しながら見上げ、激しい好奇心のある目つきを上官に投げかけた。しかし、ヴィア艦長は、片手を額に当てて身じろぎもせずに立っていた。突然、軍医の片方の手を発作的につかみながら、彼は死体を指差し、「アナニアへの神罰だ。見ろ」と大声でいった。

今だかって見たことのない『ベリポテント号』の艦長の興奮した様子に当惑しており、また、その事件については今のところまったく何も知らなかったのだが、それにもかかわらず、その分別心のある軍医は、沈黙を守っていた。ただ、なぜそのような悲劇が起きたのかという点についての真剣な疑問の気持ちを目つきで示しながら。

しかしヴィア艦長は、考えに夢中になっていて、また身動きもせずに立っていた。やがて彼は再び急に動きだし、「主の御使いに殴り殺されたのだ。それでもその御使いは絞首刑に処せられなくてなならぬ」と激しく大声でいった。

不意に発っせられたこれらの激しい言葉、つまり、今のところ先行する事件を知らされていないその聞き手にとっては単につじつまの合わないものにすぎない言葉に軍医はひどく当惑した。しかし今、心を落ち着かせるかのように、ヴィア艦長は以前より激しさを抑えた口調で手短にその出来事に至るまでのいきさつを述べた。「さあ、手早く片付けなければならぬ。彼（死体を

意味する）を向こうの小部屋へ片付けるのを手伝ってくれ。」例の前檣楼員が閉じ込められている部屋の反対側の部屋を指しながら、彼はそう付け加えた。秘密にしたいという欲望を暗示しているようなので、自分には説明できないほどに奇妙に思われるこの依頼にあらためて当惑したが、その部下は、従うほかはなかった。

「さあ行け」とヴィア艦長はいくらかいつもの様子を取り戻していった。「すぐに行け。私は、ほどなく臨時軍法会議を召集するつもりだ。海軍大尉たちに何が起こったか知らせろ。そしてモーダント氏（海兵隊長を意味する）にも報告せよ。そして、彼らにその事を内密にしておくよう、命じてくれ。」

20

不安と懸念で一杯になりながら、軍医は艦長室を後にした。ヴィア艦長は突然精神を冒されたのだろうか。それとも、あまりにも不思議で異常な悲劇によって引き起こされた、ただの一時的な心の動揺だったのだろうか。臨時軍法会議については、少なくともそれは配慮の足りないことであるという感じを軍医に与えた。彼が思うには、やるべきことは、ビリー・バッドを監禁し、それも慣例によって決められた方法によって監禁し、そして、とても異例な事件なので、それ以上の行動は小艦隊に再び加わるときまで延期し、それから、司令長官にゆだねることであった。彼は、ヴィア艦長のいつにない動揺と彼が興奮して叫んだ言葉を思い出したが、これらはヴィア艦長の通常の態度とはあまりにも矛盾していた。ヴィア艦長は錯乱したのだろうか。

しかし、かりにそうだとしても、証明できそうにない。それでは、軍医には何ができるだろうか。気が狂ってはいないが、実際、知性が必ずしも損なわれていないというわけでもないと思えるような艦長の下に従属している将校の立場ほどつらい立場は考えられない。彼の命令に反論することは不遜になるだろう。彼に抵抗することは反逆になるだろう。

ヴィア艦長の命令に従って、軍医は、起こったことを海軍大尉たちと海兵隊長に知らせたが、その際に艦長の心理状態については何もいわなかった。彼らは、十分に、彼自身の驚きと心配を分かち合ってくれた。彼と同様に、

彼らも、そのような事件は、司令長官にゆだねられるべきであると考えているようであった。

21

虹のなかでスミレ色が終りオレンジ色が始まるところにだれが線を引けようか。われわれには、はっきりとこれらの色の違いはわかる。だが、どこで前者の色が後者の色と最初に溶け合い始めるのか。正気と狂気についてもそうである。いくつかのはっきりした事例では、正気と狂気の違いは疑いの余地がない。だが、いくつかの想定上の事例では、あまりはっきりしないさまざまな程度があり、ほとんどの専門家は正確な境界線を引くことを引き受けようとはしないだろう。もっとも、診察料がかなりの金額であれば、なかには引き受ける専門家がいるだろうが。報酬を得るためなら、どんなことであれ引き受ける人間が出てくるものだ。

ヴィア艦長は、軍医が専門的かつ個人的に推測したように、どんな程度にせよ、本当に突然に気が変になったのだろうか。これは、読者の皆さんが、この物語が提供する限りの光に照らし合わせて、ご自身で決めなければならない。

これまで物語ってきたこの不幸な事件が最も悪い時期に起こったということは、残念ながらあまりにも本当だった。というのは、この時期は、二つの暴動が鎮圧された直後であって、海軍の威信にとって大変重大な余後期間で、あらゆる英国の海軍司令官が、慎重さと厳格さという、容易には融合できない二つの特性を要求されていた時期であった。さらにこの事件には一つのゆゆしき点があった。

『ベリポテント号』上で起きたこの事件に先立ち、かつそれに付随している、ジャグラーの技を思わせるような状況によって、また、この事件を正式に裁定するための規範であるところの軍法に照らし合わせても、ビリーとクラガートに具現されている無罪と有罪が事実上、立場を変えた。

法的な見地からいえば、この悲劇の明白な被害者は、何の罪もない男を犠牲者にしようとしていた男だった。そして、ビリーの議論の余地の無い行為

は、海軍の見地からすると、海軍の犯罪のなかで最も憎むべきものを構成したのだった。しかもさらに別の事情があった。この事件にかかわる本質的な善と悪は、それがはっきりすればする程それだけ、忠実な司令官の責任にとって扱いにくくなったのである。というのも、彼は、その根本的な善悪の区別に基づいてその事件に裁定を下す権限を与えられてはいなかったからである。

『ベリポテント号』の艦長は、概して決断の早い男であったが、彼が用心深さが敏速さに優るとも劣らず必要だと感じていたのは、そういうわけで、あまり驚くべきことではなかった。一切の事情を考慮すれば、彼が方針を決めることができるまで、しかも細部にわたってまで決めることができるまで、そして、それだけではなくて、最終の措置が行われる間際まで、可能な限り事件が知れ渡らないように用心することが賢明だと彼は思った。この点で彼は、過ちを犯したのかもしれないし、犯さなかったのかもしれない。しかし、二つあるいは三つ以上の下級将校室と士官室での秘密の話において、彼が何人かの下士官によって少なからず非難されたのは確かであった。それは、彼の友人たちによって、そして彼のいとこのジャック・デントンによっては激しい形で、星のように輝くヴィアに対する職業上の妬みのせいにされた。中傷的な噂に対する理由を想像できないわけではなかった。その事件について秘密を維持した点、しばらくの間、事件に関するすべての情報を例の殺人が起こった場所、つまり、後甲板船室に限定した点、こういった点において、野蛮なロシア皇帝ピョートル一世によって造られた首都で一度のみならず起こっていた、宮殿での悲劇の数々に際して取られた手段と何らかの類似性が潜んでいた。

このケースはまさに次のようなものだった。すなわち、可能であれば、『ベリポテント号』の艦長が、船が小艦隊と再び合流するまで前檣楼員を囚人として厳重に監禁しておくにとどめ、それ以上のいかなる行為にも取りかからず、喜んで延期し、それからこの事件を司令長官の判断にゆだねたであろうようなケースであった。

本当に、真の軍人将校は、ある点においては、真の修道僧のようだ。前者が軍隊の義務に忠誠を尽くす誓いを守る時には、後者が修道僧の服従の誓い

を守る際に払うものに劣らぬ自己犠牲を払うのだ。

もし敏速な行動を取らなかったら、前檣楼員の行為は、砲列甲板に知れるや否や、乗組員たちの間で下火になっているノアでの暴動の残り火をもよみがえらせる結果になるだろうと感じて、ヴィア艦長はこの事件の緊急性を判断し、他のすべての考えを却下した。しかし、彼は良心的な規律至上主義者ではあったが、単なる権威のための権威の愛好家ではなかった。彼は道義的責任に伴うさまざまな危険を独占する機会に喜んで応ずる気はまったくなかった。少なくとも、上官に意見を求めるか、同格者もしくは下格者とでも共に責任を分かってしかるべき道義的責任を自分一人で引き受けることはしなかった。そう考え、最終責任をもつ人物として自分自身にその指揮を保持する権利、もしくは必要なときに公式または非公式に口を差し挟む権利を保留しながら、彼の部下の士官たちが行う即決裁判へこの事件を引き渡すことが慣例に矛盾していないことを彼は喜んだ。したがって、臨時軍法会議は、彼がその構成員を選び、即座に召集された。その構成員とは、副長、海兵隊長、そして航海長であった。

水兵に関する事件で海兵隊長を副長と航海長の仲間に加えたという点で、司令官はことによると一般的な慣例からは逸脱していたかもしれなかった。彼は、今までの経験から、その下士官を判断力の確かな人間で、思慮深く、自分が経験したことのない難しい事件に取り組む能力をまったく欠いているわけではないと見なしていたので、そうする気になったのだ。しかし、ヴィア艦長は、彼についてでさえ、いくらかの潜在的な不安を抱いていないわけではなかった。というのは、彼はきわめて気立てのよい男で、晩餐を楽しみ、ぐっすり眠り、肥満の傾向があり、戦争においては常に勇ましさを維持するだろう男であるが、何か悲劇的なことを伴う道徳的な難題については、全面的に信頼できるということにはならないかもしれなかったからだ。副長と航海長についていえば、正直な性質の人物たちで、ここぞという時には折り紙つきの勇敢さをもっていたが、彼らの知能は、ほとんど航海中の操船術の問題や職業上交戦で要求されるものに限定されるということにヴィア艦長は気付かざるを得なかった。

裁判は、不幸な事件が起こったのと同じキャビンで開かれた。この艦長室

は、船尾甲板の下の空間を占めていた。船尾に向かって、両側に小さな個室があり、一つは今一時的に拘置所として、もう一つは死体置き場になっていた。そしてその間にもっと小さな区画があり、船首のほうへ広がって、やがて、船の幅と一致する長さの、かなり大きい長方形につながっていた。適度な寸法の天窓が一つ頭上にあり、この長方形の空間の両側面には、簡単に小カロネード砲の砲門に転用できるような、上げ下げ枠が取り付けられた舷窓が二つずつあった。

すべてのことが素早く準備され、ビリー・バッドが召喚された。ヴィア艦長は当然この事件の唯一の証人として出廷していたが、目撃者ということで一時的に自分の階級を落としていた。しかし艦長は、見たところ些細な事柄で、自分の階級を奇妙に維持していたのだ。つまり、その目的で彼は風上側で証言し、裁判官たちは風下側に座ることになったのだ。ヴィア艦長は、クラガートの告発の内容を何一つ省略することなく述べ、また、囚人であるビリーがクラガートの告発を受けたときの態度についても証言して、悲劇につながるすべてを簡潔に語った。この証言を聞き、三人の裁判官たちはかなり驚き、ビリー・バッドをちらっと見た。ビリーは、クラガートが主張した暴動の企ても、ビリー自身が犯した否認できない行いも、とてもやるような人物ではなかったからだ。副長は、裁判官として上位に自分を位置付け、囚人であるビリーの方を向き、次のようにいった。「ヴィア艦長の供述は終わった。ヴィア艦長のいわれた通りかね？ それとも違うかね?」

応答では、意外にも、ビリーの音節は発声上、予想されていたほどの障害を被らなかった。彼の応答は次のようであった。「ヴィア艦長は真実をいわれた。ヴィア艦長のおっしゃった通りです。でも、先任衛兵伍長のいった通りではありません。僕は王のパンを食べたのです。僕は王に忠実です。」

「おい、君を信じよう」とヴィア艦長がいった。彼の声は抑えられた感情を示していたが、その感情は彼の声以外からは伺えなかった。

「そういって下さって、あ、ありがとうございます、閣下！」とビリーは吃りながらいうと、もう少しで取り乱しそうになった。しかし、別の質問を受けて彼はすぐに自制心を取り戻した。そして、その質問に対して、ヴィア艦長と同じように感情の高ぶりを感じたせいで発音に苦労しながら答えた。

「いいえ、私たちの間に悪意はありませんでした。私は先任衛兵伍長に悪意を抱いたことは一度もありませんでした。あの人が亡くなってしまったことは申し訳ないと思っています。彼を殺す気はなかったのです。もし口が利けていたら、私は彼を殴ったりはしなかったでしょう。でも、あの人は、私に面と向かって、しかも艦長の面前で卑劣な嘘をつきました。だから、私は何かいわなければならなかったのです。でも、殴ることでしかそれをいえなかったのです。本当なのです。」

この率直な人物の直情的で公明正大な態度を見て、裁判官たちは、その悲劇の証人が述べたものであり、そして暴動を起こす意志をビリーが熱心に否定した直後に述べられたため、つい先程彼らを当惑させた言葉、つまりヴィア艦長の「おい、君を信じよう」という言葉に含まれたすべてのことが確認されたと理解した。

次に、全乗組員のいかなる部署においてであれ、トラブルの初期――明白な言葉は避けられたが、トラブルというのは暴動を意味していた――の気配のようなものを彼が知っていたか、それとも疑っていたか、ということがビリーに尋ねられた。

その返答は遅れた。裁判官たちは、これを先程のいくつかの回答が手間取ったり遮断されたりしたのと同じ発声上の機能障害のせいだと当然考えた。だが、主たる理由はそれではなかった。その質問は、船首投鉛台で後部甲板員と会って話したことをビリーの心にすぐに思い出させたのだった。ただし、自分の船乗り仲間を不利な立場に陥れる密告者の役に少しでも似たものを演じてしまうことに対して生まれながらにもっていた反感、すなわち、忠実な軍艦の乗組員として、その出来事を報告するのが義務であり、それを怠れば、もしそのことで告発され、立証されれば、最も重い刑に処せられることになったであろうに、そのとき彼がそれを報告することを妨げたのと同じ無知な信義という、間違った意識、この意識と、現在、実際に陰謀は何も企てられていないという、今彼がもっていた根拠のない印象の力のほうが大きかった。出てきた答えは否定の言葉だった。

「もう一つ質問がある」と海兵隊長が初めて口を開き、困惑しながら真剣にいった。「君は先任衛兵伍長が君に不利になるようにいったことは嘘で

あったという。それでは、君が二人のあいだでまったく悪意は無かったと断言しているのに、なぜ彼はそのような嘘をついたのか、しかもそんなに悪意に満ちた嘘をついたのかね？」

その質問を聞いて、その質問が自分の考えのまったく及ばない、不可解な精神の領域に図らずも触れたので、ビリーはひどく困惑し、どきまぎした態度を見せた。その様子を観察していたとしたら、隠された罪の意識を何気なく示した証拠になると推論しただろうと思われる人が存在するだろうことは容易に想像できる。困惑しながらも、ビリーはなんとかして骨を折って答えようとした。しかし、彼は突然その無駄な努力を断念した。それと同時に、彼の最上の支持者であり友であると考えていたかのように、ヴィア艦長のほうに訴えるような一瞥を向けた。「君がビリーに問いかけた質問はまったく当然のものである。しかし、どうすれば彼がその問いに正しく答えることができるだろう？あるいは、だれかほかの者にしてもだ。あそこの中で横たわっている彼を除いて」とその死体が横たわっている個室を示しながらヴィア艦長はいった。「しかし、そこで横になっている者はわれわれが召還しても起き上がってはこない。先任衛兵伍長を駆り立てていたと考えられる動機とはまったく別に、そしてビリーの一撃を挑発した原因とは関わりなく、海軍裁判所は今回の裁判では、その一撃の結果にのみ注目せざるを得ない。そして、その結果は、その一撃した人の行為によるものにほかならないと見なされるべきである。」

この発言の意味をビリーが十分に理解したとはとても思えないが、それでも、この発言のせいで、彼はその話し手に対して物足りなさそうな、不審そうな視線を向けたが、その視線は、言葉は伴わぬものの表現力に富んでいて、その点で、生まれの良い品種の犬が、犬の知能にとっては不明瞭な動作がなされたあとで、その動作についてのなんらかの説明を捜し求めながら主人に向けるかもしれない視線に似ていなくもなかった。そしてこの発言は、三人の士官、とくに海兵隊長に著しい影響を与えた。話し手側の早計な判断を含む、予期しない意味が込められているように彼らには思われた。それは、すでに十分明白だった精神的動揺を増大させる役目をした。

海兵隊長はまた口を開き、彼の仲間とヴィア艦長に同時に話しかけながら、

疑惑を示唆するような口調で次のようにいった。「だれもいない。つまり、この船の乗り組み員のなかには、ということですが、この事件において依然として不可解なままである事柄に側面から光を投げかけるかもしれない人はいない。もっとも、側面からの光が得られるとしての話ですが。」

「それは思慮深く表現されている」とヴィア艦長はいった。「あなたの趣旨はわかる。ああ、たしかに秘密な部分があるが、聖書の文句を使うと、それは『不法の秘密』であって、心理を扱う神学者が論議する問題である。しかし、軍事裁判はそれとどんな関わりがあるというのだろうか。われわれにとって、可能な調査は、あそこの男の永遠に続く舌のもつれによって断ち切られた」と再び遺体安置室を示しながらいった。「囚人の行為、それだけをわれわれは扱わなければならない。」

海兵隊長は、ヴィア艦長のこの発言に対して、そしてとくに結びの反復に対して、適切な答え方がわからず、悲しげに発言を控えた。副長は、最初は法廷での裁判官としての上位の立場を当然ながら引き受けていたのだが、今は、ヴィア艦長の一瞥に、それも言葉よりももっと効果的な一瞥に威圧されて、また上位の立場に戻った。彼は、囚人のビリーの方を向いて「バッド」といい、とても落ち着いた口調とはいえない口調で「バッド、君自身のために何かもっといいたいことがあれば、今いいなさい」と続けていった。

若い水兵は、こういわれて、再び素早い一瞥をヴィア艦長に向けた。それから彼は、ヴィア艦長の表情からヒント、つまり今は黙っているのが一番よいという彼自身の直感が正しいことを裏付けるヒントを得たかのように、「もう何もいうことはありません」と副長に答えた。

海兵隊員——前檣楼員のビリーが先任衛兵伍長にそのあとに付き従われる形で艦長室に入ったとき、艦長室の外で見張りをしていたのと同一人物——がこれらの裁判のやりとりの間じゅうビリーのそばに立っていたが、今、彼に、もともと囚人と見張り兵に割り当てられていた船尾の特別室にビリーを連れ戻すように、という指示が与えられた。二人が視界から消えたとき、三人の士官たちは、ビリーがそこにいるだけで感じていた、ある精神的圧迫から部分的に解放されたかのように、それぞれの座席で同時に身動きした。彼らは、困惑し、決しかねた目つきでお互いを見やったが、決断しなければな

らない、それもさっさと決断しなければならないとは思っていた。

ヴィア艦長はというと、いつもの放心状態に陥っていたらしく、無意識のうちに彼らのほうに背を向けて、上げ下げ枠のついた舷窓から、風上のほうのたそがれの海の単調な空白をじっと眺めながら立っていた。だが、裁判官たちの沈黙は続き、ときどき相談が低い真剣な声で手短になされてその沈黙が破られたが、この様子がヴィア艦長の意識を呼び覚まし、元気づけるように働いた。彼は、くるりと向きを変えると船室を斜めに行きつ戻りつした。船が風下のほうに横揺れすると、傾いた甲板を登って、風上へと上がって行った。彼は意識してはいなかったが、このような行動で、風、そして海のように強い原始的本能に逆らってまでも困難を克服しようと決意した心を象徴していたのである。やがて、彼は三人の前に立ち止まった。彼らの顔をつくづくと眺めたあと、自分の考えを述べるために、それをまとめようとして立っていたというよりも、むしろ、善意ではあるが知的には成熟していない男たち、彼自身にとっては自明の理であるいくつかの原則を明示することが必要である男たちに、自分の考えをいかに一番うまく提案するかを内心で熟慮しながら立っていた。話すことについてのよく似た苛立ちが、おそらく、優れた精神の持ち主に大衆の集会でものをいうのを思いとどまらせる一つの理由であろう。

いざヴィア艦長が話したとき、彼がいったことの内容と、その発言の仕方の両方に見られた何かが、活動的な経歴に伴う実際的な訓練を緩和し、和らげる、ヴィア艦長だけが身に付けている学問の影響力を示していた。このことは、彼の言葉遣いと一緒になって、完全に実際的な類（たぐい）の艦長たちが、仲間うちでヴィア艦長について申し立てていた、彼の学者ぶった面への非難の根拠を時折示していた。そういった非難を加えていた艦長たちも、英国海軍が、星のごときヴィアと同じ階級であって、彼ほど有能な士官を入隊させてはいないことを率直に認めたではあろうが。

彼のいったことは次のような趣旨であった。「これまで私は単なる証人にすぎなかった。そして、この危機に際して君たちに混乱したためらいが見て取れなければ、この時点で別の立場からの発言、君たちの補佐としての発言をしようという気はさらさら起きない。君たちのためらいは、疑いもなく、

軍人としての義務と道徳上の良心のとがめ、同情によって活力を与えられた良心のとがめとの対立から生まれたものだ。この同情ということになると、私としても同感せざるをえない。しかし、私は、至上の義務を大切にし、決断力を弱めることになるかもしれない良心のとがめに対して戦う。だからといって、紳士諸君、この事件が異例なものだということから目をそらそうとしているわけではない。思索的な面から見るならば、この事件は決疑論者からなる陪審員団に任せられるべきかもしれない。しかし、ここにいる我々は決疑論者あるいは倫理学者の役目を果たしているわけではないし、これは実際的な事件であり、海軍の法律のもとで、実際的に対処されるべきものである。

「ところで、あなたたちの良心のとがめのことだが、それは、あたかも薄暗がりのなかで動くといった状態なのでは？それを誰可(すいか)してみよ。前へ進み出させて名を名乗らせよ。さあ、君たちの良心のとがめは、およそ次のようなことを意味しているであろう。もし、酌量すべき事情は意に介さないとすれば、私たちは先任衛兵伍長の死を囚人の行為によるものと見なさねばならず、それならば、その行為は、重大な犯罪を構成し、それに対する刑罰は死を免れないものになると。しかし、自然の正義においては、囚人の歴然たる行為のみが検討されるべきなのだろうか。どうやってわれわれは、神の前では無罪である仲間、そしてわれわれもそう思う人に、即決の不面目な死刑の判決を下すことができるというのか。これで当たっているだろう。君たちは悲しい同意の身振りをする。いや、私もそう感じる。それを身に染みて感じているのだ。それが自然の道理だ。しかし、われわれが身に付けているこれらのボタンは、われわれの忠誠が自然に対するものだということを示しているのだろうか。いや、国王に対するものであることを示している。本来の原始のままの自然である海こそが、われわれが動き、船乗りとして存在する領分である。しかし、国王の士官としてのわれわれの職務は、大海と相応ずるくらいに自然な領域にあるのだろうか。まったくそうではなくて、士官となったとき、われわれは最も重要な点で、生来の自由行為者であることをやめたのだ。戦争が布告されるとき、われわれ士官は前もって相談を受けるだろうか。われわれは命令に従って戦うだけだ。もしわれわれがその戦争を是認す

ると判断するとしても、それはただの偶然の一致にすぎない。他の様々な点においても同様である。今の場合もそのことが当てはまる。というわけは、これらの現在の審理の結果として起こる有罪の判決のことを考えてみなさい。有罪の判決を下すのは、われわれ自身というよりも、むしろわれわれを通して機能している軍法ではないだろうか。その法とその法の厳格さに対して、われわれには責任がない。われわれが誓約した責任とは次のようなものである。つまり、いかなる場合においてであれ、どんなに無慈悲にその法が作用しようとも、それでもわれわれはそれを遵守し、執行する、ということだ。

「だが、本事件の異例な側面が、君たちの内なる心を揺り動かす。私の心でさえ、揺り動かされる。だが、われわれは、温情をもった心が冷静であるべき頭を惑わすのを許してはならない。陸上での刑事裁判で、廉直な裁判官が、涙を浮かべて嘆願して彼の心を動かそうとしている一人の心やさしい被告の親類の女が、裁判官席を離れたところで彼を待ち伏せして話しかけるのを許すだろうか。さあ、今の場合、心というのは、ときどき男がもっている女性的な面であって、この哀れを誘う女のようなものである。いかに困難だろうとも、ここではそれを無視しなければならない。」

艦長は話を止め、しばらくの間三人を真剣に注意深く観察したあと、また語り始めた。

「だが、君たちの表情から判断すれば、温情をもった心だけではなく、良心、個人としての良心も君たちを揺り動かしているらしい。だが、教えてくれないか、われわれのような地位を占めている者においては、個人としての良心は、われわれが公的な裁判を行う際の唯一の基準である法典に明示されている、あの帝国の良心に従うべきではないのかどうか。」

ここで三人は、心の中に自然に生まれた葛藤をなおさら強めるようなこの議論の成り行きによって、説得されたというよりも、むしろ感情をかき乱されて、それぞれの座席で身動きをした。

それを見て取ると、艦長はしばらく話をやめ、それから急に口調を変えて、また話を続けた。

「少し落ち着くために、事実に立ち返ることにしよう。戦時中に海で軍艦

の一人の水兵が彼の上官を殴り、その一撃で上官は死ぬ、というわけだ。その結果はさておき、その一撃自体が、軍法によると、死刑に値する犯罪だ。さらに....」

「はい、艦長」と、海兵隊長は興奮ぎみに口を挟んだ。「ある意味ではその通りでした。しかし、バッドが暴動も殺人もどちらも目論んでいなかったことは確かです。」

「確かにその通りだよ、君。そして、軍事法廷ほど独断的でなく、もっと情け深い法廷の前では、その申し立ては大いに情状酌量の理由になるだろう。『最後の審判』では、無罪が宣告されることになるだろう。だが、今の場合はどうか。われわれは軍律法という法に従って事を運んでいるのだ。子供が、その顔つきにおいて、その父親にどんなに似ていても、この条約が、その精神において、その生みの親である戦争に似通っている以上に似ることはありえない。国王軍に服役していて——実際にこの船の場合でも——自分の意志に反して国王のために戦わねばならない英国人たちがいる。それも、おそらくは、彼らの良心にも反してのことだ。人間同士という立場では、われわれのなかには彼らの態度がわからぬものでもないと思う者もいるが、海軍の将校として、われわれはそれをどれほど意に介するであろうか。敵はなおさら意に介さない。敵は、わが強制徴募兵たちをわが志願兵たちとともに、喜んで一緒に切り倒していくだろう。敵の海軍徴集兵のなかには、国王を殺したフランスの総裁政府を嫌悪しているわれわれの気持ちを共有している者もいるかもしれないのだが、その敵の海軍徴集兵に関していえば、われわれの側としても事情は同じだ。戦争はただ、正面、つまり、外見だけに注意を払うのだ。だから、軍律法、つまり戦争の申し子は、その父に似ているのだ。バッドが意図したかどうかは、まったく関係がない。

「だが、君たちの心にある心配事によって——繰り返していうが、君たちの心配している点は、私も尊重せずにはおれないのだが——その心配事のせいで困ってしまい、即決すべき出来事をこのように異常な形で長引かせているあいだに、敵が発見され、交戦ということになるかもしれない。われわれは、行動しなければならないのだ。そして、有罪判決を下すか、釈放するか、どちらか一方を選ばなくではならない。」

「有罪と判決し、しかも刑罰を軽減することはできないのですか？」と、航海長が、初めてここで発言し、ためらいがちに尋ねた。

「紳士諸君、かりに現在のような状況下で、そうすることがわれわれにとって明らかに合法的であったとして、そのような寛容さのもたらすであろう結果を十分考慮してもらいたい。人民たちは（ヴィア艦長は、この船の乗組員を指してこういったのだが）生まれつきの判断力をもっている。たいていの者は、わが海軍の慣習と伝統を熟知している。であれば、彼らはその寛容さをどのように受け取るであろうか。たとえ諸君たちが彼らに説明できたとしても――われわれの職務上の立場ゆえに説明することは禁じられているのだが――彼らは強制的な規律によって長い間影響を受けてきているので、それがあれば、事の性質を十分理解し、正しく識別する資格が得られるかもしれないような知的敏感さは彼らはもち合わせていないのだ。いや、乗組員たちにとって、ビリーの行為は、どのような言葉遣いで報告されたとしても、上官に対する反抗という、目に余る行為をなそうとして犯すことになった、歴然とした殺人であろう。それに対してどのような刑罰が科せられるべきか、彼らは知っている。しかしその刑罰が科せられないとする。なぜだ、と彼らは熟考するであろう。水夫がどんなものか君たちは知っていよう。彼らはノアでの最近の暴動のことを思い起こさないだろうか？そうだ。彼らは十分な根拠のあった恐怖、英国のいたるところで起きたパニック状態を知っている。彼らは諸君の寛大な判決を臆病からきたものだと考えるであろう。彼らはわれわれが尻込みしている、つまりわれわれが彼らを恐れている、この重大な情勢が新しい問題を引き起こさないように、この情勢でとりわけ要求されている、法に定められた厳格さを実行するのをわれわれが恐れている、と思うでろう。彼らがそのような推測をするとなれば、われわれにとってなんと不面目なことだろう。それから、規律にとってなんと致命的であろうか。そこで君たちは、私が任務と軍法に促されて、どの方向へ向かって決然と進んでいるかわかるだろう。しかし、諸君、君たちが私を誤解しないように、と願う。私はあの不運な若者に対して君たちが同情するのと同じように同情している。しかし、ビリーは、もし彼がわれわれの本心をわかってくれるなら、このような軍事上の必要に追られて、つらい選択を無理強いされているわれ

われに対してでさえ同情するような、寛大な性格の男だと私は思う。」

こういい終わって、彼は甲板を横切って上げ下げ枠のついた舷窓のそばの元の位置にもどり、暗黙のうちに、三人が結論に達するに任せた。船室の反対側では、困った裁判官たちが黙って座っていた。忠実な臣下たちは、平凡で実際的であり、心の底では、彼らはヴィア艦長が彼らに述べたいくつかの点について意見を異にしていたが、まじめな男で、海軍の階級においてまさっているのと同じくらい頭脳においても自分たちよりも上であると彼らが感じていた人物に反論する能力は無かったし、その意志もほとんど無かった。彼の言葉は、三人に相当の影響を与えたが、それでも、海軍の士官としての彼らの本能に対する結びの訴えほど彼らが痛切に感じたものはなかったと考えて間違いはなかろう。つまり、軍艦の乗組員による、航海中の、階級が上の者に対する暴力的な殺害が、迅速な刑罰に処することを要する重大な犯罪以外のものとしてまかり通ることが許されるならば、当時の艦隊のはっきりとしない乗組員たちの気分を考慮したときに、それが規律に対してどのような実際的な影響を与えると考えられるかについて、彼がほのめかした見通しのことである。

一八四二年、アメリカ合衆国のブリッグ、『サマーズ号』の司令官は、いらいらした気分に駆り立てられ、軍律法を基にして作られた法、いわゆる「軍法」に従って、そのブリッグの乗っ取りを計画した反逆者として、士官候補生一人と水兵二人の海上での処刑を決定したのだが、この三人の裁判官たちが、そのときの司令官の気分に多かれ少なかれ類似した気分にさせられたと考えても間違ってはいないであろう。そしてその決定は、平時であり、『サマーズ号』は基地からほんの数日の近距離のところにいたのにもかかわらず、執行された。後に陸で召集された海軍査問会議において、この処刑の正当性は立証された。これは歴史的事実であるが、説明を加えずに、ここに引き合いに出したまでのことである。たしかに、『サマーズ号』における事情と『ベリポテント号』における事情は異なっていた。だが、士官たちが感じていた緊迫感は、十分な根拠があったかどうかは別として、ほとんど同じものだった。

ある無名の作家がこういっている。「ある戦闘の四〇年後に、戦闘に参加し

なかった人が、あの戦いはかく戦われるべきであった、と論じることは簡単なことである。自ら、砲火の下で、物を見えにくくする煙に巻き込まれながら戦いを指揮しなければならないことは別の事柄だ。実際的かつ道徳的な考慮が必要とされ、迅速に行動することが必須であるような、他の緊急事態に関しても大体同じことがいえる。霧が深ければ深いほど汽船の危険は増す。それなのに、他の船に衝突し沈没させる危険に直面するにもかかわらず、船はスピードを増す。船室で安楽にトランプをしている人たちは、船橋で注意怠りない男の責任をまったく考えることはない。」

要するに、ビリー・バッドは、正式に有罪の宣告を受けた。そして、そのときが夜だったので、翌日早く朝直のときに桁端で絞首刑が執行されることを言い渡された。もし夜でなければ、このような事件では慣例となっていたように、絞首刑は直ちに執行されていただろう。戦時中には、陸においても海上においても、臨時軍法会議によって下された死刑判決は――陸では、軍司令官の首の一振りだけで判決が下されることがあるが――有罪判決のすぐ後に続いて上訴なしにさっさと執行される。

22

ヴィア艦長が自ら進んで囚人に軍法会議の判決を伝える役を買って出た。そのために、彼はビリーが拘置されている個室へ行き、そこにいた海兵隊員にしばらく下がっているように命じた。

この会見で、判決を伝えた以外に何が起きたのかはまったくわかっていない。二人はしばらくその個室に閉じこもったのだが、二人の性格、それぞれが、われわれの性質のなかでもよりまれないくつかの特性――どんなに教養があっても平均的な人間にはほとんど信じられない程きわめてまれないくつかの特性――を生来的にもち合わせていた二人の性格から考えると、あえてあれこれ憶測を試みることもできよう。

もし、ヴィア艦長がその有罪の判決を受けた者にこのとき何も隠し立てしなかったのであれば、すなわち、その決定がなされるにあたって彼自身が演じた役割を率直に明らかにし、同時に彼がそのような行動を取った動機を明

らかにしていたのであれば、それはヴィア艦長の精神の有り様に一致していたであろう。ビリーの側にとっては、おそらく、そのような告白は、それを促したのとほぼ同じ精神でもって受け入れられたのであろう。実際、彼は、艦長が打ち明けて話してくれるほど自分を高く評価してくれていることをありがたく思い、一種の喜びを感じたかもしれない。判決それ自体についていえば、死を恐れない者として、自分にそれが伝えられたのだと彼が気付くことができなかったなどということはありえない。それ以上のことが起きたのかもしれない。ヴィア艦長は、最終的には、冷静もしくは冷淡な外見の下にときおり潜在している激情を明らかに示したかもしれなかった。艦長は、ビリーの父親であっても不思議でない年齢であった。軍務に対して厳格な態度で献身する人物であったが、私たちの形式化された人間性において未だ原始の状態にあるものに彼自身を次第に溶け込ませながら、ついにはビリーを胸に抱いたかもしれない。神の厳しい命令に従って若いイサクを決然と今にも捧げようとしていたときに、アブラハムは若いイサクを胸に抱いたと考えられるが、ヴィアの態度もかくのごとくであったのかもしれない。しかし、その神秘的なことの実態はわからない。ここで私が述べようとしている状況に似た状態のもとで、偉大な自然が生み出した、より気高い等級の二人がどこで抱き合おうとも、それにまつわる神秘性は、遊び歩いている世間の人々にはめったに示されない。生き残った人にとって犯すべからざる秘密がしばらくのあいだ存在する。そして、それぞれの、より神聖なる雅量の大きさを示すものに続くもの、つまり、神聖なる忘却が運よく最終的にすべてを覆い隠すのだ。

まさに個室を出ようとしていたヴィア艦長に最初に出会ったのは副長であった。副長は五十歳の男であったが、彼が見た表情、つまり、そのとき強者の苦痛を表わしていた表情は、意外で、驚くべきものであった。有罪を宣告された者が、有罪の決定を下すに際して主役を務めた者ほど苦しまなかったという事実は、まもなく触れずにはおられない場面における前者の叫びによって明らかに示されていた。

23

短時間の間に急速に相次いで起こった一連の出来事についてきちんと述べようとすれば、もっと時間がかかるかもしれない。とくに、そのような出来事のより良い理解のために、ここかしこで説明か解説が必要だと思われるのならば。生きたままでは二度と艦長室を去らなかった人物、そして、そこからどうにか出たけれども、死刑を宣告された者としてそこを去った人物が入ってから、今述べたばかりの密室での対談までの間、一時間半も経過していなかった。しかしながら、それは、相当数の船の乗組員の間に、先任衛兵伍長とあの船乗りが艦長室の中でどうしてそんなに手間取っているのだろうか、ということについて憶測を起こさせるには十分長い合間であった。というのも、彼らが二人とも艦長室に入るのが見られたが、彼らのどちらも出て来るのが見られなかったといううわさが立ち、そして、このうわさが砲列甲板と檣楼にまで広まっていたからだが、巨大な軍艦の人々はある点では村人たちのようであり、起こっているすべての外面的な動きあるいは静止状態を顕微鏡的に注目していた。それゆえに、大嵐のような天候ではまったくなかったのに、すべての乗組員が第二折半当直時に呼び出されたとき――そのような状況では、こういった時間帯に召集がかかるのは通例ではなかった――乗組員たちは、二人の男が，いつもの居場所から引き続いていなくなっていることと関係するような、なにか並々ならぬ発表に対して、多少の心構えはできていたのである。

そのとき、海は穏やかだった。それに加えて、船の装具と動いている男たちのくっきりとした影が水平に落ちている場所を除くと、昇ったばかりの満月に近い月が白い上甲板一面を銀色に染めていた。後甲板の両側には武装した海兵隊員が整列していた。ヴィア艦長は、士官全員に囲まれ、所定の場所に立って、部下たちに話しかけた。このときの彼の態度は、彼自身の船上における最高の地位にまことにふさわしい態度であった。はっきりとした、簡潔な言葉遣いで、彼は皆に艦長室で起きたことを述べた。つまり、先任衛兵伍長が死んだこと、彼を殺した者はすでに即決裁判で裁かれ、死刑を宣告されたこと、さらに、処刑は翌日早く朝直のときに行われることについてであ

る。彼は、この機会をとらえて軍紀の維持についての説教をすることは差し控えた。海軍における当時の状況下で、軍紀違反の結果がどうなるかについては、その結果自体に語らせようとするべきだとおそらく考えたのであろう。

集まった水兵たちは、彼らの艦長の話を黙って立って聞いていた。地獄の存在を信じている人たちが集まって座り、牧師の説くカルヴィン主義的説教の一節を黙って聞いているのと同じような具合であった。

しかし、艦長の話の最後に至って、困惑したつぶやきが起きた。それは大きくなり始めた。そのとき、合図を受けて、ほとんど即座に掌帆長と彼の部下たちの鋭いホイッスルの音が鳴り響き、その騒ぎが抑えられた。船首を回すよう、命令が下された。

水葬の準備のために、クラガートの遺体は彼の会食仲間だった兵曹たちの幾人かに引き渡された。そして、ここで、本筋でない種々の事柄で物語の進行を邪魔しないために、先任衛兵伍長は、しかるべきときに、彼の海軍での階級にふさわしいような形で、葬送の儀式をもって海にゆだねられたということだけ、付け加えておこう。

その悲劇的な事件から生じた、あらゆる公の行為と同じく、この行為においても、慣習が絶対的に固守された。クラガートについてであれ、ビリーについてであれ、もしどんな点に関してでも、少しでも慣習から逸脱すれば、その船の乗組員は必ず望ましくない推測をあれこれすることとなったであろう。というのも、水夫たち、さらに特定すると軍艦の兵士たちは、男のなかでも最もしきたりを厳守する者だからである。よく似た理由で、ヴィア艦長とその死刑囚との間のコミュニケーションは、すでに語った密室での対談ですべて終わり、後者はいま、最期の準備をするために、通常のしきたりに身をゆだねられた。彼は、艦長室から見張り付きで移動させられたが、特別な警戒措置、少なくとも目につくような警戒措置は取られなかった。できるならば、部下の水兵たちに、どんな不都合なことが起きるだろうか、と将校たちが懸念しているのだと推量さえもさせないことが、軍艦における暗黙のルールである。ある種のトラブルが実際に懸念されればされる程、将校たちは自分たちの心配をますます秘密にするのである。それにもかかわらず、目立たない形で警戒が強められるかもしれないが。今の例では、その囚人につ

けられた見張り番は、従軍牧師以外にはだれにも囚人と連絡を取らせないようにという、厳しい命令を受けていた。そして、この点を完全に保証するために、あるいくつかの目立たない措置が取られていた。

24

旧式の七十四砲艦では、上部砲列甲板として知られる甲板は、上甲板によって覆われていた。上甲板には兵器が置かれていないわけではなかったが、大部分は風雨にさらされていた。上甲板には、ふつう、いかなるときでもハンモックが吊されることはなかった。水兵たちのハンモックは、下部砲列甲板と宿泊甲板の上で揺れていた。宿泊甲板は、共同の寝場所であるだけでなく、水兵たちの袋を収納するための場所でもあった。そしてこの宿泊甲板の両側には、大きな箱あるいは水兵たちの多数の食事仲間のための可動式の食器棚が並んでいた。

『ベリポテント号』の上部砲列甲板の両側には、大砲が砲列をなしていたのだが、見よ、その右舷の、大砲の間に規則正しく間隔をあけて形作られたすき間の一つに、手枷、足枷をはめられ、歩哨に見張られて、ビリー・バッドが横たわっている。これらの大砲はすべて、その当時の、より大きな口径のものだった。これらの大砲はがたごと音を立てて動く木製の砲架に据え付けられており、繰り出すための駐退索ならびに強力な側面滑車装置のような扱いにくい装備によって、勝手に動かないようになっていた。大砲と砲架は、頭上の環に収められた長い込め矢と短いみちび桿（さお）とともに、当時の習慣に従って、黒く塗られていた。そして、重い麻の駐退索は同じ色合いにタールが塗られていて、葬儀屋たちと同じような装いを帯びていた。これらの周囲の物のもつ葬儀の色合いとは対照的に、横たわる水兵の外衣、白いジャンパーと白のズック製のズボンは、それぞれ多少汚れていて、すき間の暗い明りのなかでぼんやりと光っていた。それは、どこかの高地の洞窟の暗い入り口あたりで四月初めに未だ残っている、色の汚れた雪片のようであった。事実上、彼はすでに経帷子（きょうかたびら）、いや、経帷子というよりも、その代わりになるような衣服にくるまれている。彼の上方にあって、ほとんど彼を照らすことなく、二

つの夜間戦闘用のカンテラが上甲板の二本のどっしりとした横梁からぶら下がっている。軍の請負業者によって納入された油をつぎ込まれ（彼らの利益は、正当なものであれ、不当なものであれ、あらゆる国で、死の収穫物を先取りした部分である）、それらのカンテラは、木栓を詰められた大砲が突き出している、開いた砲門を通して、色々なものに遮られて斑点になりながら、入り込もうとほとんど無駄な努力をしているおぼろな月明りを汚している。とびとびにある他のカンテラは、大聖堂のなかの小さな懺悔室か付属の小礼拝堂のように、上部砲列甲板の二つの砲列の間にある、長くて見通しのあまりきかない幅の広い通路から分岐している、より薄暗いすき間を幾分照らし出すだけである。

今「ハンサム・セイラー」が横になっている甲板とはそのような状態であった。バラ色に日焼けしていたので、皮膚の本来の青白さは見られなかった。その色をぬぐい去るには、風と太陽から数日間隔離する必要があったであろう。しかし、頬骨の骨格のとがった部分は、暖かみのある色合いの肌の下で、微妙に輪郭をはっきりさせ始めていた。燃えるような心を自制するうちに、短い体験のなかには、船倉の中の隠れた火が梱（こり）の中の綿花を焼き尽くすように、われわれの人体組織を滅ぼすものもある。

だが、その時ビリーは、宿命の万力（まんりき）に挟まれ締め付けられたかのように、二つの大砲の間に横たわっていた。人間には悪魔の化身となってその力を身に付けた人たちがいるが、ビリーの苦悩は、寛大な若い心がそういう人と初めて出会ったことから主として生じたのだが、その苦悩による緊張はそのときすでに終わっていた。彼の苦悩は、ヴィア艦長との密談のもつ、何らかの癒す力のせいで消えてしまっていた。ビリーは、忘我の境地にいるかのようにじっと横になっていたのだが、以前に述べた、ビリーのあの青年期の表情が浮かんでは消えたりしていた。その表情は、夜、静かな部屋の暖かい暖炉で燃える火が両頬のえくぼにちらつくとき、ゆりかごの中ですやすや眠る赤子の表情にやや似かよったりもした。というのは、手枷、足枷をはめられたビリーが夢うつつのときに、ときどき、あるとりとめのない思い出、あるいは夢の生み出す、穏やかで幸せそうな光が、彼の顔一面に広がり、それから、いったん消えはするが、また新たに現われるのであった。

従軍牧師は、ビリーに会いに来て、ビリーの状態がわかり、したがって、ビリーが彼の存在を意識している兆候が見えないのを悟ったのだが、しばらくビリーを注意深く見て、それからこっそり脇へ寄り、しばらくの間立ち去った。従軍して軍から俸給を得てはいるけれども、やはり聖職者の一人である彼でさえ、彼が注視したものを超える平静さをもたらすことのできる慰めを申し出ることは不可能だ、と彼はおそらく思ったからであろう。だが、従軍牧師は、夜更けにまたやってきた。一方、囚人のビリーは、そのときには自分の周りの様子に気付いており、従軍牧師が近づくのを認めた。それからビリーは、礼儀正しい、ほとんど快活ともいえる態度で従軍牧師を歓迎した。だが、続く対話のなかで、従軍牧師がビリー・バッドに、ビリーが死ぬ運命にあり、それも夜明けに死ぬのだということについて信心深く理解させようと努めても、ほとんど効果が無かった。なるほど、ビリー自身が、こだわることもなく、自分の死のことをもうすぐだといったのであるが、しかし、それは、ときに子供たちが一般に死を口にするような具合であった。子供というものは、色々な遊びをするなかで、棺や会葬者を伴った葬式ごっこをして遊んだりするものである。

だが、子供たちのように、死が実際どのようなものであるかをビリーが理解できなかったのではない。そうではなくて、死についての不合理な恐怖など、彼はまったくもっていなかったのだ。こういった恐怖は、混じり気のない自然にあらゆる点でより近いところにいる野蛮社会よりも、高度に文明化された社会に広く流布しているものである。そして、どこか他のところで述べたように、ビリーは本質的に野蛮人だったのだ。ゲルマニクスがローマで勝利の凱旋をしたときに行進させられた、ビリーの同胞である古代ブリトン人の捕虜たち、すなわち、生きた戦利品たちと同じくらいに、その服装にもかかわらず、野蛮人だったのだ。後の野蛮人たち、彼らはおそらく若者で、キリスト教により早く改宗した古代ブリトン人たちから選ばれた者たちで、少なくとも名目上は改宗者となっていた者たちであったが、彼らがローマに連れてこられたとき、（今日でいえば、海洋の小さな島々からの改宗者たちがロンドンに連れてこられるであろうように）、その当時の教皇が、彼らの澄んだ、血色のよい顔色や亜麻色の巻毛といった、イタリア人の特徴とは非常に

違った珍しい容貌の美しさに見とれ、「Angli(アングル族)だって」——Angliというのは、近代の派生語でいえば、English (イングランド人) に当たる——「彼らは Angli と呼ばれるのか？それは、彼らが angeli (アンゲリ：天使たち) にとても似ているからなのか？」と感嘆の声をあげたのだったが、ビリーは、その彼らとまったく同じように野蛮人だったのだ。もし、それがもっと後の世であったら、その教皇は、フラ・アンジェリコの描いた天使たちを心に留めていたと考えられるであろう。ヘスペリデスの園で林檎をもぎ取っている天使たちのある者は、英国の娘たちのなかでも美しい部類の娘たちがもつ、淡い色のバラのつぼみのような顔色をしているのだ。

もし善良なる従軍牧師が、若き野蛮人、ビリーに、古い墓石に刻まれた頭蓋骨、時計の文字盤、交差させた二本の骨の図像が伝えるような概念と同類の死についての概念をわからせようとしても無駄であったとすれば、救いならびに救世主という概念をはっきり悟らせようとする彼の努力も同様に効果の無いものであった。ビリーは耳を傾けた。しかし、それは、おそらく畏敬の念からというよりも、ある種の自然な丁重さからそうしたわけであって、たぶん心の底では、彼と同じ階級のほとんどの水夫たちが、抽象的なもの、あるいは、日常生活の普通の調子とは異なるものに対するのと同じような態度でそういった事柄について考えていたのであろう。そして、この水夫たちが牧師の説教に対して見せる態度は、超自然的な奇蹟に満ちたキリスト教の入門書に対して、ずっと昔、熱帯の島々で、いわゆる優れた部類に属する未開人、たとえば、クック船長の時代か、あるいはその少し後のころのタヒチ島の人間が示した態度と少なからず似通っていた。タヒチ島の人間は、自然な礼儀を重んずる気持ちで受け取ったが、わがものにはしなかった。それは、差し伸べられた手の掌に置かれた贈り物を握ろうとしないのに似ていた。

しかし、『ベリポテント号』の従軍牧師は、善良な心に備わる良識をもった、思慮深い男であった。だから、ことここにいたっては、彼は、自分の仕事を無理に遂行しようとはしなかった。ヴィア艦長の要請を受けて、大尉の一人が彼にビリーに関するほとんどすべての情報を伝えていた。そして、「最後の審判」に赴くために身に付けるものとして、宗教よりも無垢のほうがより優れているものだと感じていたので、彼は、不承不承ながら引き下がったの

である。しかし、その前に、感動のあまり、彼は英国人としてはとても奇妙な行動、そして、状況を考えると、牧師を本職とする人間としてはなおさら奇妙な行動を取った。身をかがめて、彼は、同じ一人の人間として、ビリー、つまり、軍の法律上は重罪人である男の美しい頬に接吻したのである。従軍牧師は、死を目前に控えてはいても、ビリーを一つの教義に改宗させることは到底できないと感じていたのだが、それでも、ビリーの行く末については、彼は心配はしていなかった。

その若い水兵が本質的には無罪であることを知らされていながら、立派な人物である従軍牧師が、軍の規律に殉ずる人の死を防ごうとして少しの労も取らなかったからといって、驚くには当たらない。そんなことをしてみたところで、砂漠に祈願することと同じくらい役に立たないばかりでなく、彼の職分に厚かましくも違反することにもなったであろう。彼の職分は、掌帆長や、その他だれであれ、他の海軍士官の職分と同じように、軍紀によって厳密に規定されていたわけだから。ずばりといえば、従軍牧師は、戦争の神、マルスの軍勢のなかにまじって働く、キリストの召使いである。そういった者として、彼は、クリスマスに祭壇に置かれたマスケット銃と同じくらい、矛盾した存在である。それでは、なぜ彼のような人物が軍艦に乗り込んでいるのか？それは、大砲がその証拠となっている目的を彼が間接的に補助するからである。また、暴力以外のものを事実上すべて廃棄してしまうことに対して、柔和な者の宗教による認可を彼が与えるからだ。

25

その夜は、上甲板の上はたいそう明るかったが、下方の洞穴のような甲板ではそういうわけでもなく、水平な通路は、炭鉱の層をなした横坑道のようだった。だが、やがてその明るい夜も過ぎていった。火の車に乗った予言者エリヤが天空に姿を消しつつ、エリシャに彼のマントを投げ落としていったように、去らんとしている夜は、その青白いマントを日の出に譲り渡した。控えめで、恥ずかしそうにしている光が東の空に現われたが、そこでは、半透明の羊毛に似た、いくつもの筋のついた靄が広がった。その光は、ゆっく

りとその輝きを増した。突如「八点鐘」が船尾で打ち鳴らされると、それに応えて、船首からさらに大きく鳴り響く一つの金属性の音が鳴った。午前四時だった。直ちに、澄んだホイッスルの音が聞こえた。処刑に立ち合わせるためにすべての乗組員を召集するホイッスルの音だった。非番の水兵たちが、重い砲弾の入った箱戸棚で周りを囲まれている大きな昇降口を上って押し寄せてきた。彼らは、すでに甲板にいる見張り兵たちと、大檣と前檣の間の空いている場所、例の大きなランチとその両側に積み重ねられた黒い円材でふさがれた場所を含めて、空いている場所一面に広がった。そのランチと円材は、少年火薬運搬員と若い水兵たちに、処刑に立ち合うための最も高い場所を提供した。檣楼員たちで編成された見張り兵の一団は、別の集団を形成し、あのバルコニーの手すりにもたれ、上体を前に傾けて、下の群衆を見下ろしていた。このバルコニーは、七十四砲艦上においてはけっして小さくはないものだった。水兵にしろ、少年たちにしろ、話すときは必ずひそひそ声だった。もっとも、ほとんどの者は、まったく口をきかなかった。ヴィア艦長は、前回のときと同じように、士官たちの集団に囲まれて、真ん中に位置しており、船首に向かって、船尾楼甲板の船楼端の近くに立っていた。彼の真下、後甲板の上には、刑の発表の場面とほとんど同じように、完全武装した海兵隊員たちが整列していた。

昔、海上では、水兵の絞首刑の執行は、一般的に前檣最下部の帆桁で行われた。今の場合、いくつかの特別な理由から、大檣下桁が当てられた。囚人は、やがて、その帆桁の一方の側の下に連れて来られた。従軍牧師が彼に付き添っていた。そのときにも注目され、また後になってとかくコメントされたように、この最後の場面でその善良な男は、ほとんど、いや、まったくというべきか、おざなりな態度を示したりはしなかった。彼が死刑囚と交した言葉はわずかであったが、真の福音は、彼の言葉よりも、死刑囚に相対するときの彼の表情および態度に見られたのである。死刑囚に対する最後の身支度は、掌帆長の部下二人によって速やかに終えられ、刑の執行が差し迫った。ビリーは船尾に面して立った。いざというときになって、彼の言葉、唯一の彼の言葉、それも、まったくどもることなく発せられた言葉は、「ヴィア艦長に神の祝福あれ！」というものだった。首に不名誉な絞首策をつけた男から

のあまりにも思いがけない音節、これは名誉の座のあるほうの船尾に向けられた、しきたりに従って重罪犯人とされた者の祝福であったが、これらの音節は、その若い水夫のまれに見る容姿の美しさによって強められ、驚くべき効果をあげた。その彼の容姿の美しさは、身を切るように深遠な、ここしばらくの様々な経験を通して、今や強い精神性を帯びていたのであった。

いわば、意志の働き無しに、まさにその船の乗組員がある声の電流を伝える媒体であるかのように、甲板上、そして檣上から、一つの声となって、共鳴して鳴り響くこだまが起こった。「ヴィア艦長に神の祝福あれ！」だが、そのとき、彼らはビリーのことだけを考えていたのだが、それは、彼らの目に映るものがビリーのみであったのと同じともいえよう。

ビリーの発した言葉、そして大声でその言葉を跳ね返す、自然に起きた反響を耳にして、ヴィア艦長は、船の武器庫の銃架に置かれたマスケット銃のように、真直ぐ、身じろぎもせず立っていた。それが、冷静な自制心によるものか、それとも、感銘を受けたために引き起こされたある種のつかの間の麻痺状態によるものかは、定かではない。

『ベリポテント号』の船体は、風下への周期的な横揺れからゆっくりと戻りつつあったが、ちょうど再びバランスを取り戻していたとき、事前に打ち合わせられていた、無言の合図が出された。たまたまではあったが、それと同時に、東の空に低く垂れ込めていた靄に、神秘的な幻視において見られる「神の子羊」の毛の状態に似て、穏やかな輝きが差し込んだ。そしてそれと同時に、込み合った群衆の見上げた顔に見守られて、ビリーは昇った。そして、昇りながら、夜明けのバラ色を全身に浴びたのである。

帆桁の端に到達した、手足を縛られた姿には、皆が驚いたことに、なんらの動きも見えなかった。つまり、穏やかな天候のもと、ゆっくりとした横揺れによって生じる動き以外には何らの動きもなかったが、重い大砲を備え付けた大きな軍艦にあっては、その横揺れはとても堂々としたものであった。

26

『ベリポテント号』の事務長は、どちらかといえば血色が良く、丸々と太っ

ており、哲学者として深遠であるというよりは会計士として正確といったほうが当たっている人物であったが、彼は、何日かのち、食事の際に、今述べたばかりの特異な出来事に関して、例の船医に向かって、「意志力に宿る力をなんとはっきり証していることだろう」といったものだ。船医は、むっつりとした男で、痩せていて背が高く、慎重で皮肉な態度が、温和なというよりも丁寧なというべき様子と混じり合っていたのだが、次のように答えた。「残念ですが、どうも同調しかねますね、事務長さん。厳密に行われた絞首刑では――ところで、特別の指令を受けて、バッドの絞首刑がどのように行われるべきかについては、私自身が指図したのですが――そういった絞首刑では、完全に吊り下げられた後に起るもので、しかも吊り下げられた死体に起因する動きは、それがいかなるものであれ、筋肉組織の機械的痙攣を表わしているのです。それゆえ、動きがないとしても、それは、馬力に起因していないのと同様、あなたがいうところの意志力にも起因していないのです。失礼な言い方ですが。」

「しかし、君のいう筋肉の痙攣は、程度の差こそあれ、このような場合には必ずあるのではないかね？」

「確かにおっしゃる通りです、事務長。」

「それでは、今回それが見られなかった理由を君はどうやって説明するのかね？」

「事務長、この件の特異性についてのあなたの感じ方と私の感じ方が異なっていることは明らかです。あなたは、意志力なるものによってそれを説明しようとされます。この意志力というのは、まだ科学の語彙には加えられていない用語ですが。私はですよ、自分の現在の知識からして、あえてその理由を説明しようとはまったく思いません。われわれが、ぞんざいにねじを巻いていて、最後に無理に巻いてしまったためにゼンマイがぷつんと切れてしまった時計ととても似通った形で、ハリヤードに最初に触れたとき、バッドの心臓の働きが、すでに最高潮の状態にあったのにさらに途方もなく強い感情によって強められ、突然止まった、とたとえ仮定したとしても、次に起こった特異な現象の理由をどのように説明するのですか？」

「それじゃ、君は、筋肉の痙攣性の動きが無かったことを驚くべき現象で

あると認めるんだね？」

「たしかに驚くべき現象でした、事務長。その原因をただちに何かに帰することができない現象だったという意味においてですが。」

「それじゃ君、教えてくれないか。」相手は粘り強く続けた。「あの男の死は絞首索によってもたらされたのか、それともある種の安らかな死だったのか、どちらだったのかね？」

「安らかな死というのは、事務長、あなたのおっしゃる意志力のようなものです。つまり、また失礼な言い方になりますが、私はその科学用語としての信憑性を疑っています。それは、想像から生まれたものであり、またきわめて抽象的でもありますしね。手短にいえば、まったくわけがわからないということです。」ここで彼は、突然口調を変えていった。「医務室に助手たちには任せたくない患者が一人いましてね。すみませんが、これで失礼いたします。」会食の席から立ち上がると、彼は礼儀正しく引き下がっていった。

27

処刑の瞬間とその後ほんの少しの間、静寂が続いた。この静寂は、船体に規則正しく当たる波の音と、操舵手の目があらぬ方へ誘われたために起きた、バタバタという帆の音によってかえって強調されたのだが、この静寂も、容易には言葉で言い表せない音によって次第にかき乱された。熱帯地方の山地に降る土砂降りのにわか雨、平原には降らないようなにわか雨によって突然増水した急流の音を聞いたことのある人、そして、その急流が険しい森の斜面を突き進んでいくときの、最初の抑えられたざわめきを聞いたことがある人なら、だれであれ、そのときに船上で聞こえた音がどんなものであったか、多少はわかるかもしれない。音の源が遠く離れているように思われたのは、その音がつぶやきのように不明瞭であったからである。なにしろ、その音はすぐ近くから、外ならぬ船の無蓋の甲板に集まっている者たちから出たものだった。発音が不明瞭であったため、その音の意味ははっきりしなかったが、ただいえることは、それは、陸の群衆が陥りやすいような、考えあるいは感情のなんらかの気紛れな激変の兆候、今の場合は、ビリーの祝福の言葉を無

意識に反復した乗組員たちが、不機嫌な気持ちでそれを取り消そうとしたことをおそらく示していた。だが、つぶやきが次第に大きな声にならないうちに、一つの戦略的命令が下された。その命令は、突然の思いがけないものだったから、いっそう効果的であった。それは、「掌帆長、ホイッスルを鳴らして、右舷当直団を解散させよ。そして、解散してしまうまで見届けよ」というものであった。

トウゾクカモメの金切り声のように甲高い、掌帆長とその部下たちの澄んだホイッスルの音が、その不吉なつぶやきを突き破り、追い払った。規律の作用に屈して、群衆は半分に減った。残った者たちにしても、ほとんどは、帆桁の調整などにかかわる一時的なさまざまな仕事、すわわち、どんな当直将校でも考え付くような急場の仕事に配置された。

さて、臨時軍法会議によって海上で言い渡された死刑宣告に伴う個々の手続きは、慌てて行われているとは見えないまでも、それに近い迅速さをその特徴とする。生前はビリーのベッドであったハンモックは、帆布の棺の役目をするよう、弾丸で重りを付けたり、またその他の面でもすでに準備が整い、海の葬儀屋たち、つまり、縫帆長の部下たちの最後の任務が今速やかに終えられた。すべての準備が整ったとき、乗組員全員への二回目の召集の合図が吹き鳴らされた。それは、先程触れた戦略上の措置によって必要になったのだが、今度は、水葬に立ち合わせるための合図であった。

この締めくくりの儀式については、詳細を物語る必要はなかろう。ただ、次の点だけは述べておくことにする。傾けられた平板からその上の積み荷が海の中に滑り落ちたとき、再び奇妙な人声のざわめきが起きた。今度は、それは、ある種の大きな海鳥たちが発した、これまたはっきりとした意味のつかめない音と混じり合っていた。これらの鳥は、砲弾を入れたハンモックが斜めに海中に重々しく没したために起きた、風変わりな水の動きに注意を引かれて、叫び声をあげながら、その場所に飛んで来たのだ。海鳥たちは、船体のとても近くまでやって来たので、痩せた、二重関節をもつ翼のきしる音、つまり骨のきしむ音が聞こえたほどだった。そよ風を受けて、船は水葬の場を後方に残して進んで行ったが、海鳥たちは、広げた翼の動く影を落としながら、そして、陰気な鳴き声で鎮魂曲を歌いながら、まだその場所を低く旋

回していた。

私たちの時代よりももう一つ前の時代の水夫たちほど迷信深い水夫たちにとって、しかも、今や深い海に沈んでいるが、空中にぶら下げられたビリーの姿が見せた驚くべき静止状態を目の当たりにしたばかりの軍艦の乗組員にとって、海鳥たちの振舞いは、それが単に獲物を求める動物的貪欲さによるものであったにせよ、並々ならぬ大きな意味をもっていたのであった。乗組員たちの間で、ある不確かな動きが始まり、ある種の違反行為も起きた。それが大目に見られたのは、ほんのしばらくのことであった。というのも、それぞれの部署に戻るよう指示するために突然太鼓が鳴らされたのである。しかも、この太鼓は一日に少なくとも二回は鳴らされ、その音は耳慣れたものであったが、今の場合には、際立って有無をいわさぬ調子をもっていた。軍の規律に長期間従っていると、平均的な人間の心の内に、ある種の衝動が生まれるのだが、正式な命令に接したときのその衝動の働きは、その迅速さにおいて、本能の働きに非常に似通ったものとなる。

太鼓の音に応えて、群衆が解散した。群衆の大半は、覆いのついた二層の砲列甲板の砲列へと分かれていった。そこでは、砲手たちは、いつものように、姿勢を正し、沈黙したまま立った。そのうちに、副長が剣を小脇に抱えて、後甲板の所定の場所に立ち、砲列のそれぞれのセクションの指揮をとっている、剣を携えた中尉たちから、次々に正式に報告を受けた。最後の報告が終わると、彼は、いつものように敬礼をしながら、艦長に報告の概要を伝えた。こうしたことには時間がかかったが、今の場合は、それが、太鼓を鳴らしていつもよりも一時間早く乗組員たちを部署につかせた目的であった。なかには、ヴィア艦長のことを規則を絶対視する軍人だと考えている者もいたが、そういったヴィア艦長のような士官が、かくのごとくに慣習から逸脱することを認めたことが、彼が乗組員たちの一時的気分であると考えたものに、異例の行動が必要であると思わせるものがあったことの証左である。「人間にとって、形式、綿密に検討された形式がすべてだ。それが、竪琴で森に生息する野獣たちを魅了したオルフェウスの物語で表現されている意味だ」と彼はよくいったものだ。そして、彼は、イギリス海峡のかなたで起こっている形式の崩壊とそれがもたらしたさまざまな結果について、この理論を当

てはめたことがあった。

すでに述べたように、一時間早く乗組員を部署につかせたのだが、すべてがいつもの時刻の場合と同様に進行した。後甲板に位置していた軍楽隊が聖歌を演奏し、その後で、従軍牧師がいつもの朝の礼拝の儀式を執り行った。それが終わると、解散の合図の太鼓が鳴った。規律と戦争目的に役立つ音楽並びに宗教儀式の影響を受けて普段の精神状態に戻った水兵たちは、いつものように整然と、大砲のそばにいない時のための居場所として決められた場所へ散っていった。

今やすっかり夜が明けた。低く垂れ込めた、羊毛のような靄はすでに消え去っていた。先程までそれに輝きを与えていた太陽によって舐め尽くされたのだ。周囲の大気は、その静かな清澄さの点で、まだ大理石商の庭から運び出される前の、磨き上げられた、滑らかな白い大理石の塊のようであった。

28

まったくの虚構の物語であれば、形式の均整美を達成することが可能であるが、本質的に、作り話というよりも事実により多く関係する物語においては、それほど容易ではない。妥協することなく真実を語れば、いつもぎざぎざの縁(ふち)がいくつか残るものだ。そういうわけだから、その種の物語は、ややもすれば、建造物に使われる頂華(ちょうげ)ほどの仕上がり状態をもたないものになる。

「大暴動」の年に「ハンサム・セイラー」がどのような運命をたどったかについては、これまで忠実に述べてきた。彼の人生の終りと共に物語が終わるのがふさわしいのであろうが、後日談として少し付け加えておいても悪くはないであろう。それには、短い章が三つもあればこと足りる。

フランス革命時の執政政府のもとで、かつて王朝時代の海軍を組織していた船舶が、総じて命名し直されたが、聖ルイ九世に因んで名付けられた戦列艦『サン・ルイ号』は『アテ（無神論者）号』と改名された。そのような名前は、フランス革命政府の艦隊にあって新しく付けられた他の船舶の名前のうちのいくつかのものと同様に、支配権力の不信心な厚顔さをはっきり示してはいたが、それでも、そういう意図は無かったにせよ、よく考えて見れば、

戦艦にこれほどぴったりの名前が付けられたことはなかったともいえよう。実際のところ、『蹂躙号』や『エレボス号』（『地獄号』）あるいはその他、これらと似通った名前よりはるかにうってつけであった。

すでに述べたさまざまな事件が起こったのは、『ベリポテント号』が任務のために派遣されて単独で巡航していたときのことであったわけだが、その後、英国艦隊の元へ戻る途中、同艦は『アテ号』とたまたま遭遇した。交戦が起きたのだが、その交戦の際に、ヴィア艦長は、敵艦の舷艢越しに切り込み隊員を乗り込ませる目的で、自艦を敵艦に横付けにしようとしていて、敵艦の艦長室の舷窓から放たれたマスケット銃の銃弾に当たった。単に負傷したといって済ますことができないような重傷を負って、彼は甲板にばったりと倒れ、最下甲板後部の准士官の居室に運ばれたが、戦闘時においては負傷兵の収容と治療に使われるこの部屋には、すでに何人かの彼の部下が寝かされていた。副長が代わって指揮を取った。副長の指揮下で、ついに敵艦を拿捕し、ひどく損傷してはいたが、希有の幸運に恵まれ、交戦場所からさほど離れていなかった英国の港、ジブラルタルまで首尾よく曳航した。

かの地で、ヴィア艦長は、他の負傷者とともに戦艦から降ろされた。彼は数日間は生きながらえたが、しかし、ついに最期の時を迎えた。不運にも、ナイルの海戦、そしてトラファルガーの海戦を待たずして彼は亡くなってしまったのだ。自身の哲学における厳格さにもかかわらず、彼は、あらゆる情熱のうちで最も秘めたるもの、つまり、野心を、あまり自制もせぬまま抱いていたかもしれなかったのだが、その彼も決して名声の頂点を究めることはなかったのである。

亡くなる少し前、肉体の痛みを和らげる一方、人間のより微妙なほうの要素に不思議な作用を及ぼすあの麻薬の影響下にあって横たわりながら、彼は、「ビリー・バッドよ、ビリー・バッド」とつぶやいたのだが、それを聞いた付き添い人には説明のつかない言葉であった。これが悔恨の口調で述べられたものでないことは、この付き添い人が『ベリポテント号』の海兵隊長に語った内容からも明らかと思われる。海兵隊長といえば、臨時軍法会議のメンバーのうちで、ビリーを有罪とすることを最も渋った人物であり、ビリー・バッドが誰を指しているのか、もちろんよく知っていた。この時には、彼は、自

分の知っている内容を自分の胸にしまっておくことにしたのではあるが。

29

処刑の数週間後、当時の海軍新聞に――これは、正式に認可を受けたウィークリーであった――「地中海ニュース」という見出しのもとに、他の記事とともに、例の事件の説明が載せられた。記事の大部分は、誠実な気持ちで書かれていたが、事実がこの記事を書いた人物に伝わったときの伝わりかたのせいで―― 一部は風説によるものであった――内容が歪められ、部分的にはねつ造される、という次第となった。問題の事件の説明は以下のごとくであった。

「先月十日、英国軍艦『ベリポテント号』上にて、嘆かわしき事件が発生した。同艦の先任衛兵伍長、ジョン・クラガートは、下級の乗組員のあいだである種の陰謀が計画されて間もないこと、その首謀者がウィリアム・バッドという名の者であることを突き止めた。同先任衛兵伍長が、艦長の面前にてバッドの罪状を述べていた際に、バッドは突然鞘から短刀を抜き放ち、腹いせに、心臓に達するまでの刺し傷を上官に負わせたのである。

この犯行および使用された凶器から判断して、英国人名を名乗って海軍に徴集されはしたが、刺殺者が英国人ではなく、英国人名を借用した外国人であることは、間違いないことと思われる。現今の海軍の尋常ならざる人員不足のため、こういった外国人を相当数入隊させてきているのである。

この犯罪の凶悪さならびに犯人の極度の邪悪さは、犠牲者の性格を考慮すれば、さらに甚大なものに思われてくる。犠牲者はといえば、立派で、思慮分別のある中年の男性で、下級の職である兵曹の一人であったが、だれよりも士官たちがよく知っているように、英国海軍が効率よく機能するのは、兵曹たちによるところが大なのである。犠牲者の職務は責任の重いものであり、苦労多き割には報われることのないものである。そして、彼は、自分の強い愛国の情ゆえに、ますます忠実にその職責を果たしたのである。当今の他の多くの事例についてもいえることであるが、この場合にも、この不運な人物の性格は、故ジョンソン博士のものとされる、すねた言い習わし、つま

り、『愛国心とは悪党の最後の隠れ家なり』という言い習わしが間違っていることの際立った証明となっている。もしそのような証明が必要とされているのであればの話であるが。

犯罪者は、自分の罪に対して処罰を受けた。ただちに処刑を行ったことは、後の経過から判断すれば、有益であった。今は、『ベリポテント』上において、不穏な点はまったく見られない。」

上記は、とっくの昔に時代遅れとなって忘れ去られた新聞に掲載されたわけだが、ジョン・クラガートとビリー・バッドの両名がそれぞれいかなる人物であったかということの証（あかし）としては、人間の記録としてこれまで残されたものは、これ以外にはない。

30

海軍においては、あらゆる物がしばらくの間尊ばれる。軍務における際立った出来事と結び付く具体的な物があれば、それが何であれ、記念物に転化される。水夫たちは、前檣楼員が吊り下げられた帆桁の行方を数年にわたって追っていた。船から海軍工廠へ、そしてまた、海軍工廠から船へと帆桁が移るたびに、それがどうなったか彼らは知っており、ついに海軍工廠で流木止め用の材木になってしまったときでも、まだその経緯を知っていたのだ。彼らにとって、その帆桁の一かけらは、キリストが磔刑になった十字架の一片のようなものなのであった。悲劇の真相については知らなかったし、海軍の見地から見て、あの刑罰が下されたのは止むを得なかったというふうにしか考えてはいなかったのだが、それでも、彼らは、ビリーは意図して相手を殺したりできぬと同様、反逆を企てることなどできない人間だった、と本能的に感じていた。

彼らは、「ハンサム・セイラー」のさわやかで若々しい姿、そして、せせら笑いによって一度も歪んだことのない顔、また、もっと微妙な、内なる心の卑劣なねじ曲がりによって一度も歪んだことのない顔を思い起こした。彼が死んだこと、しかも多少謎に包まれたまま死んでしまったことが、彼ににについてのこういった印象を強めることとなったのは、確かである。ビリーの性

質と本人が意識せぬその純真さを皆がどのように評価していたかという点については、ビリーと同じ当直団の一員であった別の前檣楼員が、あまり洗練された形ではなかったが、やがて、『ベリポテント号』の砲列甲板上で表現することとなった。水夫のなかには、たくまぬ「詩的」天分に恵まれている者もいるのだが、この前檣楼員も、そういった人物だったのである。このタールで汚れた水夫は、ある詩を作ったのだが、それが、しばらくの間『ベリポテント号』の乗組員のあいだに広まった後、ついにはバラッドとして、粗末な形ではあったが、ポーツマスにおいて印刷された。タイトルは、その水夫の付けたものである。

手枷を付けられたビリー

ありがたや、牧師さん、人も来ぬこのすき間にやってきて、
膝つき祈ってくれるとは、
俺、ビリー・バッドのようなつまらぬ者のためにさ。でも、見て、
砲門から月の光がさまよい込んで来ているよ！
見張りの短剣の先に当たり、この一角を銀色に染める。
でも、それも消える、ビリーの最後の日の夜明けには。
明日は、俺も、玉滑車に付けられ、
桁端からぶら下がる真珠になるのさ。
ブリストル・モリーにやったイヤリングみたいにさ。
ああ、宙ぶらりんになるのは、判決じゃなくて俺なんだ。
そうだ、すべてお手上げ、俺も上がらにゃならぬ、
朝早く、甲板から帆桁の方へ。
今すき腹なんだが、それじゃどうにもならぬ。
一口何かくれるだろう、最後のわずかなビスケット。
会食仲間の一人がくれるはず、最後の別れの酒一杯。
でも、巻上げ装置からも索止めからも顔をそむけりゃ、
だれが俺を吊り上げるのか、わかりゃしない。
ハリヤードが上がるのに、号笛も鳴らぬとは——まてよ、全部嘘っぱち

じゃないのか？
眼がかすむ。俺は夢を見てるんだ。
俺を吊す太綱を斧でばっさりか？そのまま、まっさかさまか？
酒の支給の合図の太鼓、ビリーは何にもわかっちゃいない。
だけど、ドナルドの奴、平板のそばにいてくれるって約束したぜ。
だから、仲良く握手するんだ、沈む前に。
いや、駄目だ。俺はもう死んでいるんだ、考えてみりゃ。
思い出す、ウェールズ生まれのタフが沈んだときのこと、
あいつの頬はバラのつぼみのピンク色。
でも、皆は俺をハンモックに包んで縛り、深いところへ沈めてしまう。
ずんずん沈む、ずんずん沈む、ぐっすり眠り込んで夢も見ぬ。
もう眠りが忍び寄るのがわかる。そこにいるのか、見張り兵、
この手枷をゆるめてはくれないか？
そして、ちゃんと上向きに寝かせてくれ。
眠いんだ。ぬるぬるした海草が俺の体にからみつく。

（完結）

追記：本稿は Harrison Hayford と Merton M. Sealts, Jr. の手になる、いわゆるシカゴ大学版の *Billy Budd, Sailor* (1962) の本文の後半を訳出したものである。本稿の元となったものは、大阪女子大学大学院英語学英米文学専攻における「米文学演習 I」の授業のための作業として、辻坂伸子、南茂由利子、大谷差智子、大曽根由美子の四名が今年度分担して作成した訳稿である。その訳稿を五人で検討してより正確なものに仕上げたのち、私がさらに独自に大幅に改変して本稿を作成した。したがって、最終責任は私にあるが、本稿はそもそもこの四名の受講生の作業が出発点になっており、ここに、彼女たちに対する感謝の気持ちを表明する次第である。なお、最終的に私が独自に改変するに当っては、『バートルビー／船乗りビリー・バッド』（東京：南雲堂、1960）、『ビリー・バッド』（東京：岩波書店、1976）、『メルヴィル中短篇集』（八潮出版社、1995）に収められた翻訳を参照したが、原文からあまりにも乖離した内容となっていたり、およその趣旨は原文の通りでは

あっても、カットされた部分が目立ったりすることが判明した。そういった理由もあって、本稿では、私が原文をどのように読み取っているかということを明確に伝えることを最優先させた点についてお断りしておく。また、今回は、いわゆる訳注を付記しなかった点、また、本来は訳注で触れるべき内容の一部を本文に組み入れた点についてもお断りしておきたい。なお、今後、本稿に徹底的に手を加え、日本語によるヴァージョンとして、しかるべき存在意義をもつような形に整える予定である。